

令和2年度 文部科学省委託事業
「共に学び、共に生きる共生社会コンファレンス」東海・北陸ブロック

障害者の 学びの場づくり コンファレンス in AICHI プログラム集

2021年1月9日 **土** 10:00-16:30
愛知みずほ短期大学 オンライン配信

主催 NPO法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会/文部科学省

協力 全国障がい者生涯学習支援研究会/全国専攻科(特別二一ス教育)研究会
愛知特別支援教育研究会/愛知みずほ短期大学

後援 愛知県/愛知県教育委員会/愛知県社会福祉協議会
名古屋市/名古屋市教育委員会/名古屋市社会福祉協議会
犬山市/犬山市教育委員会/瀬戸市/瀬戸市教育委員会

ごあいさつ

NPO 法人 学習障害児・者の教育と 自立の保障をすすめる会
理事長 宮原 とき子

みなさまご多忙な中、全国各地から、本法人と文部科学省主催の「障害者の学びの場づくりコンファレンス in AICHI」にご参加いただき誠にありがとうございます。

私どもの会は、今から 31 年前の 1990 年 4 月に保護者を中心に関係の多くの方々のご協力のもとに開校した学習障害（現在の発達障害）児の無認可 5 年制高校・見晴台学園と、見晴台学園卒業生の進路先の一環として開設した障害者福祉事業・自立支援センターをつく、そして、見晴台学園を終えた卒業生と保護者の要望を受けて 2013 年 10 月に開設した見晴台学園大学校の三つの事業体で構成されています。

私たちは、平成 30 年度、令和元年度、令和 2 年度の 3 年間にわたり、文部科学省による「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究」委託事業に取り組んでまいりました。これまでフリースクールとして長年取り組んできた見晴台学園と見晴台学園大学校が、文部科学省によって、「障害者の多様な学習活動を総合的に支援する実践研究」の場としてお認めいただいたことを大変嬉しく思います。

私たちの事業名は「生涯の学びとしての、障害青年の『学校から社会への移行期』における継続教育の役割と課題」です。ここでは、1. 生涯学習セミナー、2. 大学連携オープンカレッジ、3. 視察研修、4. 「障害者の学びの場づくりコンファレンス in AICHI」の四つの事業に取り組んできました。

今回のコンファレンスでは、イラストレーターとして、文部科学省スペシャルサポート大使の横溝さやかさんの記念公演をはじめ、障害者の学びの場づくりに長年にわたって取り組んでこられた全国各地の優れた実践から学ぶ機会を与えていただいたことに深く感謝申し上げます。また、午後からは並行して、横溝さんにご参加いただき、12-13 歳から 70 歳までの本法人などの障害を持つ人たちと、さらに学生たちが共に学び合う「生涯学習セミナー」を開催します。

このコンファレンスは、実践研究事業 3 年目のまとめにあたり、私たちに与えられた課題である障害青年の「学校から社会への移行期」の取り組みを中心に開催させていただきました。

参加者のみなさまのご協力のもとに、本コンファレンスが無事、成功裏に終わられますことを願ってやみません。

「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」の開催にあたり

文部科学省 総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課
障害者学習支援推進室長 小林 美保

文部科学省では、障害のある方々が一生涯にわたり自らの可能性を追求するとともに、地域の一人として豊かな人生を送ることができるよう、多様な学習活動の充実に向けた取組を進めています。

「知らなかったことを知ること、できなかったことができるようになること、そして人や社会とつながることは、人間の根源的な喜びである。」これは、「障害者の生涯学習の推進方策について―誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して―」（平成31年3月学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議）の一文ですが、障害のある方々にとって、環境や意識、情報などの面で、まだまだ多くの社会的障壁があり、そうした機会を十分に得られない状況にあります。

こうしたことを踏まえ、文部科学省としては、誰もが学びたいときに、いつでも学べる社会、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会の実現を目指し、各地で先進的な取組を進めている自治体、大学、団体の皆様とともに、令和元年度より「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」を実施することとし、令和2年度は全国7箇所にて開催を予定しています。

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、各地のコンファレンスは昨年度のように大人数での対面による実践交流や研究協議が困難になりました。しかし、こうした中でも各実施団体には、感染症対策に配慮したオンライン中心の開催方法を御準備いただき、ブロックを超えてより多くの方に共生社会実現に向けた生涯学習推進のメッセージが届くことが期待されます。

本コンファレンスでは、障害のある方々本人による学びの成果発表等や、学びの場づくりに関する好事例の共有、生涯学習支援に関する研究協議等を通じて、社会モデルとしての障害理解の促進や、学びの場の担い手の育成、ひいては障害のある方々の学びの場の拡大、学ぶ環境の全国的な整備につなげていくことを目指しています。

共生社会の実現や、障害のある方々の生涯学習を推進していくためには、本日御参加の皆様をはじめとして、地方自治体や大勢の方々の積極的な活動が大変重要です。引き続きお力添えいただきますよう、お願い申し上げます。

結びに、「障害者の学びの場づくりコンファレンス in AICHI」の開催にあたり、ご尽力いただいた実行委員会や事務局の皆様、御登壇いただく皆様、準備・運営にあたってくださるすべての関係者の皆様に心より感謝申し上げます。実り多いコンファレンスになりますよう、何卒ご協力をよろしくお願い申し上げます。

目次

主催者挨拶

NPO 法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会理事長 宮原とき子 (1)

文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課障害者学習支援推進室長 小林 美保 (2)

目次 (3)

プログラム (4)

趣旨説明 文部科学省学習支援推進室長 小林 美保 (5)

記念公演「sutajioCOoca の創作活動と自作紙芝居公演」 横溝さやか (9)

文部科学省委託事業成果報告

(1) 「生涯学習セミナー」 辻 浩 (名古屋大学教育学部・教授) (11)

(2) 「大学連携オープンカレッジ」 杉山 章 (東海学院大学准教授) (15)

藪 一之 (見晴台学園学園長)

事例報告

<事例検討のねらい> 小畑耕作(大和大学教授)・井口啓太郎 (文部科学省) (19)

A. 学校から社会への移行期の実践 <学校から卒業後へ>

① 「学校から社会への移行期における学びの重要性」 (20)

—特別支援学校聖母の家学園専攻科の取り組み—

辻 正 (特別支援学校聖母の家学園)

② 「進路さがしは自分さがし」 (24)

野上佳代子 (やしま学園高等専修学校)

B. 学校から社会への移行期の実践 <卒業後から学校へ>

① 「学校から社会への移行期の学びの場づくり (卒業後→学校)」 (28)

小林正尚 (社会福祉法人きのかわ福祉会シャイン)

② 「イケてる自分になってハジけたい!!～ファッションショーの取り組み～」 (32)

小西 寛之 (NPO 法人まなびキャンパスひろしま)

C. ライフステージに応じた学びの実践

① 「名古屋市教育委員会・委託青年学級～瑞穂青年学級 38 年の歩み～」 (36)

河合賢治 (ボランティアサークル汽車ポッポ)

② 「町田市障がい者青年学級と本人活動の会とびたつ会」 (40)

松田泰幸 (とびたつ会支援者)

☆ 第 2 回生涯学習セミナーのテーマと内容 竹井沙織 (中京大学非常勤講師) (44)

総括

田中 良三 (愛知みずほ短期大学特任教授・愛知県立大学名誉教授、本事業コーディネーター) (45)

資料① コンコンファレンス案内チラシ (49)

② コンファレンス連動企画 (犬山市開催) 案内チラシ (51)

後援・協力団体名 (52)

実行委員・事務局員名 (52)

プログラム

10:00~10:15

挨拶

実行委員長: 山本 理絵 (愛知県立大学教授・教育福祉学部長、連携協議会委員長)

大塚 知津子 (愛知みずほ短期大学・愛知みずほ大学学長・学校法人瀬木学園理事長)

10:15~10:30

趣旨説明 文部科学省省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課障害者学習支援推進室
室長 小林 美保

10:30~11:00

記念公演 「sutajioCOoca の創作活動と自作紙芝居公演」 横溝さやか

11:00~12:00

文部科学省委託事業成果報告

(1) 「生涯学習セミナー」 辻 浩 (名古屋大学教育学部・教授) 他

(2) 「大学連携オープンカレッジ」 杉山 章 (東海学院大学准教授)

藪 一之 (見晴台学園学園長) 他

12:00~13:00

<昼食・休憩>

13:00~16:00

事例検討のねらい コーディネーター: 小畑耕作(大和大学教授)、井口啓太郎 (文部科学省)

事例報告

A. 学校から社会への移行期の実践 <学校から卒業後へ>

① 「学校から社会への移行期における学びの重要性

—特別支援学校聖母の家学園専攻科の取り組み—

辻 正 (特別支援学校聖母の家学園)

② 「進路さがしは自分さがし」

野上佳代子 (やしま学園高等専修学校)

B. 学校から社会への移行期の実践 <卒業後から学校へ>

① 「学校から社会への移行期の学びの場づくり (卒業後→学校)」

小林正尚 (社会福祉法人きのかわ福祉会シャイン)

② 「イケてる自分になってハジけたい!!~ファッションショーの取り組み~」

小西 寛之 (NPO 法人まなびキャンパスひろしま)

C. ライフステージに応じた学びの実践

① 「名古屋市教育委員会・委託青年学級~瑞穂青年学級 38年の歩み~」

河合賢治 (ボランティアサークル自動車ポッポ)

② 「町田市障がい者青年学級と本人活動の会とびたつ会」

松田泰幸 (とびたつ会支援者)

☆ (13:00~15:00) 生涯学習セミナー (当事者や学生たちの学び合いのセミナー)

コーディネーター: 竹井沙織 (中京大学非常勤講師)

16:00~16:30

総括 田中良三 (愛知みずほ短期大学特任教授・愛知県立大学名誉教授、本事業コーディネーター)

障害者の生涯学習をめぐる社会情勢の変化

文部科学省の取組の経緯

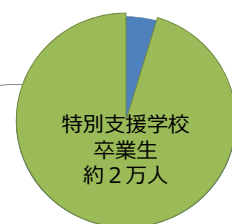
- 平成26年「障害者権利条約」批准
→第24条「生涯学習の機会の確保」
- 平成28年「障害者差別解消法」の施行
→国・自治体における合理的配慮の義務化
- 平成29年4月、大臣メッセージ
「特別支援教育の生涯学習化に向けて」を发出
- 平成29年度、生涯学習政策局に
(現 総合教育政策局
男女共同参画共生社会学習・安全課)
「障害者学習支援推進室」を新設

障害者の生涯学習に関する現状と課題

障害者の学校卒業後の状況

特別支援学校から高等教育機関への進学率は約4%、ほとんどの障害者が就職又は障害福祉サービス（就労移行支援・就労継続支援）などに進む。

就職：30.1%
障害福祉サービス
：60.3%
〔計：90.4%〕



障害者本人の意識、ニーズ

※平成30年度 障害者本人の意識等調査の結果より

「一緒に学習する友人、仲間がない」→71.7%

「学ぼうとする障害者に対する社会の理解がない」
→66.3%

「知りたいことを学ぶための場や
学習プログラムが身近にない」→67.2%

有識者会議最終報告のポイント

「障害者の生涯学習の推進方策について
—誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して—（報告）」

学校卒業後の障害者が学ぶ場が十分でない

目指す方向性

- 誰もが、障害の有無にかかわらず
共に学び、生きる共生社会の実現
- 障害者の主体的な学びの重視、個性や
得意分野を生かした社会参加の実現

取り組むべき施策

- 国、地方公共団体、特別支援学校、大学、民間団体が
役割分担し、多様な学びの場づくりを推進
- 教育、福祉、労働等の分野の取組と連携の強化が重要

3

学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業



文部科学省

趣旨

文部科学省では、平成30年度から、具体的な学習プログラムや実施体制等に関する実践研究事業を実施



社会福祉法人一麦会（和歌山県）の取組

現状と課題

令和2年度は全国20カ所で実践モデル構築を行う研究が進展
→その成果の普及、理解の促進が今後の課題

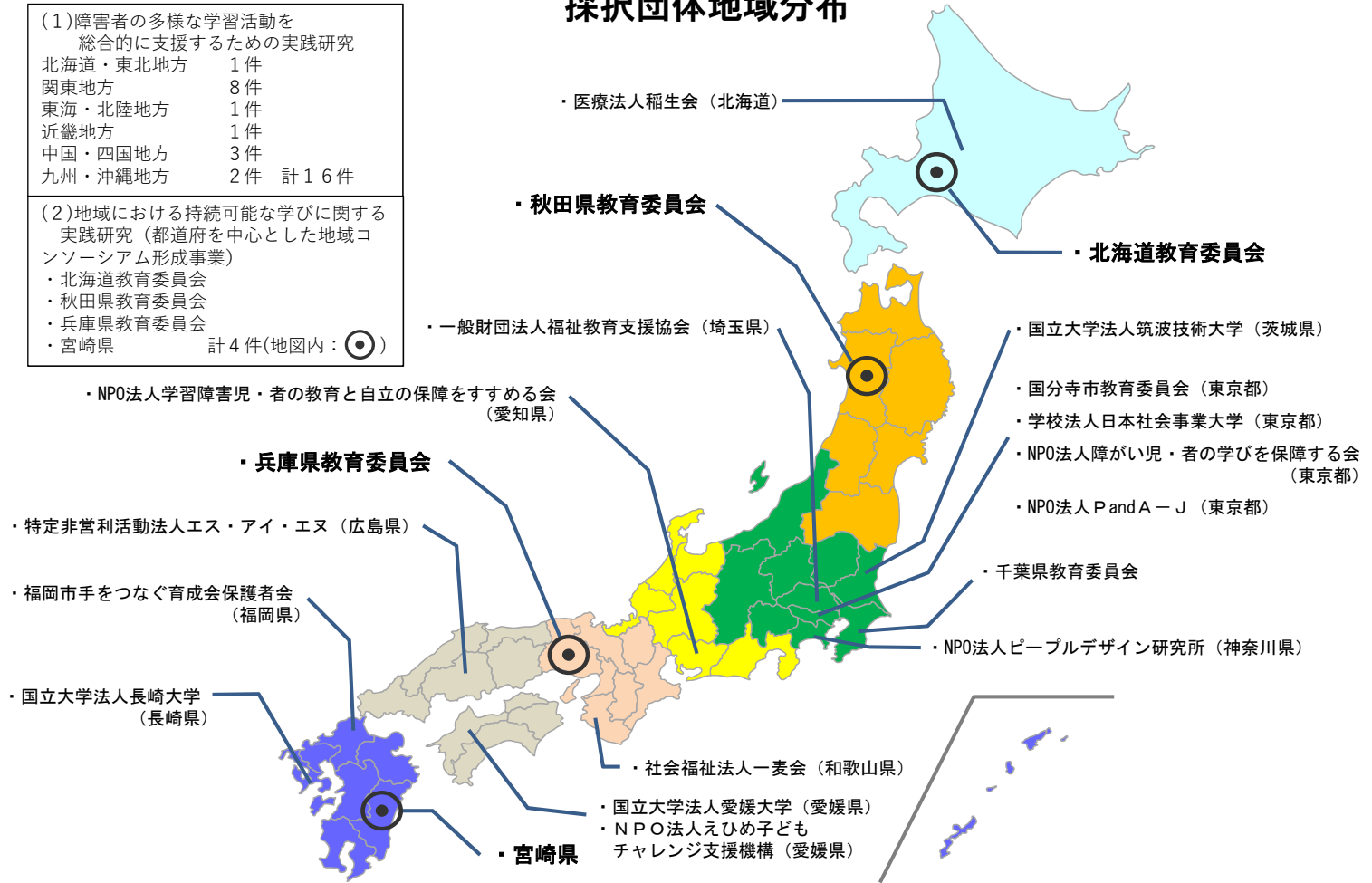
成果や課題を共有
関係する行政職員、実践者、関係者等が一同に集まる場
=コンファレンス開催



4

令和2年度「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」 採択団体地域分布

(1)障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究	
北海道・東北地方	1件
関東地方	8件
東海・北陸地方	1件
近畿地方	1件
中国・四国地方	3件
九州・沖縄地方	2件
計	16件
(2)地域における持続可能な学びに関する実践研究(都道府県を中心とした地域コンソーシアム形成事業)	
・北海道教育委員会	
・秋田県教育委員会	
・兵庫県教育委員会	
・宮崎県	
計	4件(地図内: ⊙)



共に学び、生きる共生社会コンファレンスの開催趣旨

コンファレンスとは → 会議、協議会:関係者間で共有する問題について協議すること
(Conference)

※今年度はオンラインによる開催を基本とし、一部ブロックで対面形式も併用予定

目指す成果

- 社会における**障害理解の促進**
- 実践者同士の学び合いによる**学びの場の担い手の育成・ネットワーク**
- 全国各地における障害者の**生涯にわたる学びの場の拡大・充実**

誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会の実現

主な参加者

学びの実践者・関係者、障害者の学びに関心のある人など、多様な分野・立場から参加

◎ 社会教育・生涯学習の分野から

(社会教育主事、公民館・図書館・博物館・スポーツ施設、文化芸術施設、青少年施設等の社会教育施設職員等)

◎ 特別支援教育の分野から

(特別支援学校、特別支援学級、通級指導等に関わる教員、学校関係者等)

◎ 障害福祉の分野から

(福祉サービス事業所、社会福祉協議会の関係者等)

⇒行政、大学、社会福祉法人、NPO、企業、当事者団体、障害者本人、保護者などが集う



〈令和2年度実施〉共に学び、生きる共生社会コンファレンス各ブロック開催概要

※主会場があるブロックもオンラインを併用して実施予定

No.	実施団体等名	事業名 テーマ	開催日・開催方法
1	【北海道ブロック】 北海道教育委員会	北海道共生社会コンファレンス 「コロナの時代における社会教育の実践を通じたコミュニティの可能性」	日程: 令和3年2月6日(土) 主会場: なし(オンライン開催)
2	【東北ブロック】 宮城県教育委員会	共生社会コンファレンス 東北ブロック 「『共生社会をつくる』ということ～誰もが自己を肯定できる社会になるために私たちにできること～」	日程: 令和2年11月26日(木) 令和3年1月30日(土) 主会場: なし(オンライン開催)
3	【関東甲信越ブロック】 一般財団法人福祉教育支援協会	共に学び、生きる共生社会コンファレンスIN 関東甲信越	日程: 令和3年1月17日(日) 主会場: 国分寺市本多公民館
4	【東海・北陸ブロック】 NPO法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会	障害者の学びの場づくりコンファレンス in AICHI	日程: 令和3年1月9日(土) 主会場: 愛知みずほ短期大学 ※別会場にて連動企画開催予定
5	【近畿ブロック】 兵庫県教育委員会	近畿ブロック 共に学び、生きる共生社会コンファレンス 「障害があってもなくても、もっと自由に楽しく学ぶ～共に学び、生きる共生社会に向けて」	日程: 令和3年1月29日(金) 主会場: 神戸大学ほか ※サテライト会場設置予定
6	【中国・四国ブロック】 国立大学法人愛媛大学	共に学び、生きる共生社会コンファレンス 中国・四国ブロック 「○(まる)のつどい～危機を乗り越え、共に考えよう! 障害理解の促進、障害者の生涯を通じた学びの場づくり～」	日程: 令和2年12月5日(土)、 6日(日)、12日(土) 主会場: なし(オンライン開催)
7	【九州・沖縄ブロック】 宮崎県	共に学び、生きる共生社会コンファレンス 九州・沖縄ブロック	日程: 令和3年1月23日(土) 主会場: なし(オンライン開催)

詳細は、「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」特設ウェブサイトをご覧ください。

URLはこちら → <https://www.kyoseishakai-conference.com/2020> QRコードはこちら →



7

学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業

令和3年度要求額: 163百万円
前年度予算額: 116百万円



趣旨

平成26年の障害者権利条約の批准や平成28年の障害者差別解消法の施行等も踏まえ、**学校卒業後の障害者が生涯を通じて学び続けられる社会、共に学び、生きる共生社会の実現に向けた取組を推進**することが急務。

学校卒業後の障害者の社会参加・活躍を推進するため、これまでの民間団体主体の実践研究の成果の活用・横展開を図り、**都道府県を中心とした地域コンソーシアム形成**による持続可能な生涯学習支援体制を構築し、併せて、新たに**市区町村の社会教育施設等を主な実施主体とした生涯学習プログラム**を開発・実施し、**多様な学びの場の拡充**に取り組む。そのうえで、実践研究事業等の成果の普及・活用や実践交流等のための**ブロック別コンファレンス、障害理解促進に向けた啓発フォーラム等**を実施する。

さらに、**今般のコロナ禍**において、学校卒業後の障害者が健常者と同様の学びの機会を得るために、**よりきめ細かな支援が必要**。

事業内容

1. 地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究〔125百万円〕

(1) 地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築〔57百万〕

▶ 都道府県と大学等との連携による体制整備・人材育成(6箇所)

- ◆都道府県(政令市)が中心となり、大学や特別支援学校、社会福祉法人、地元企業等が参画する障害者の生涯学習のための「**地域コンソーシアム**」を形成。
- ◆**学びの場の拡大**に向けて**市区町村職員向けの人材育成研修モデル**を開発・実証。

(1)都道府県レベルのネットワーク構築 (2)市区町村レベルの学習機会拡充

(2) 地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進〔53百万円〕※新規

▶ 市区町村による障害者を包摂する学習プログラムの開発(35箇所)

- ◆障害者の生涯学習のノウハウが乏しい**市区町村**が、実績のある**民間団体等と組織的に連携**し、主に**公民館等の社会教育施設における、障害当事者のニーズや地域資源を踏まえた新たな「生涯学習プログラム」**を開発・実施。その成果の普及・活用を目指す。

※現状・課題: 現在の本取組の中心は民間団体が中心。H30年度調査では、**障害者の学びの支援経験のない公民館等は85%超**(右記グラフ参照)。

障害者の学び支援



(3) 取組の周知・普及・連絡協議会の開催〔15百万円〕

全国で展開する取組の**情報を集約・発信するポータルサイト**の構築等を推進。

2. 生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究〔10百万円〕

障害者が一般的な学習活動に参加する際の阻害要因や促進要因を踏まえ、**読書バリアフリー法施行後の視覚障害者等の読書環境の整備に向けた課題把握や、コロナ禍における障害者の生涯学習の実態に関する調査研究**を実施。

成果や課題を共有

3. 障害者の学びに関する普及・啓発や人材育成に向けた取組〔28百万円〕

- ◆社会教育と特別支援教育、障害者福祉の各分野における**障害者の生涯学習推進の人材育成に関する有識者検討会**を設置。
- ◆実践研究事業等により開発された「生涯学習プログラム」の成果普及や実践交流等を行うため、**全国をブロックに分けてコンファレンス(実践交流会)**を実施。
- ◆障害の理解促進や共生社会実現に向けて障害当事者の参画による**障害理解啓発フォーラム**の実施。
※写真: 「超福祉の学校～障害をこえて共に学び、つくる共生社会フォーラム～」



期待される成果

- ◎各地域で障害のある人の**社会参加と活躍を推進**
- ◎地域における**支援人材の増加と障害への理解を増進**

目指す社会

- ◎障害のあるなしに関わらず生きやすい**共生社会**

8

studioCOOCA の創作活動と紙芝居公演

横溝 さやか

(イラストレーター・文部科学省スペシャルサポート大使)

【プロフィール】

競馬・牧場・世界名作劇場をこよなく愛するイラストレーター。主なモチーフは人、動物、風景、世界の国々、オリジナルキャラクターなどなど。オリジナル紙芝居「ピ・ヨンジュとオレ三世シリーズ」や世界の国をテーマにした「世界旅行シリーズ」、子どもや家族の日常をテーマにした「キッズ&ファミリーシリーズ」など数多くのシリーズを制作中。紙芝居などで様々なシーンを描いてきた経験から「〇〇が〇〇しているところ」と言ったシチュエーションを描くことが大得意。

2007年の神奈川県逗子市主催、手作り絵本コンクール一般の部で最優秀賞を受賞し、どんどん作風が細かく丁寧になる。声を使い分けた朗読が得意で、紙芝居公演を行っている。



《略歴》

- 2007年 神奈川県逗子市主催、手作り絵本コンクール一般の部で最優秀賞を受賞
- 2011年 studioCOOCA のパッパラパラダイス！展 / 2k540 AKI-OKA ARTISAN
- 2012年 studioCOOCA のパッパラパラダイス！展 / the art complex center of tokyo
- 2014年 伊藤忠青山アートスクエア スタジオクーカ展 出展
- 2015年 ARTFAIR 東京出展。
- 2016年 studio COOCA のパッパラパラダイス！ / アツコバルー 出展
- 2017年 平塚地下道ミュージアム階段イラストに採用 (右ページ写真参照)
- 2017年 湘南ひらつか七夕まつり公式グッズとして作品が採用
- 2017年 スポーツ庁障害者スポーツ団体支援企業認定ロゴマークに採用
- 2017年 文部科学省スペシャルサポート大使に就任
- 2017年 「ここから アート・デザイン・障害を考える3日間」展へ出展 / 国立新美術館
- 2018年 「ここから2-障害・感覚・共生を考える9日間」展へ出展 / 国立新美術館
- 2018年 日本遺産「大山詣り」ポスターに採用
- 2018年 ONE NATION CUP 2018 ポスターに採用
- 2018年 湘南平塚七夕まつり公式ポスターに原画が採用
- 2018年 文部科学省主催「超福祉の学校」に紙芝居公演とライブペイントで出演

【本日の記念公演の概要】

1. studioCOOCA における創作活動

studioCOOCAとは、様々なハンディキャップを持った人が、その人の好きな事・得意な事で活躍する、仕事を得ることを目的に活動する神奈川県平塚市に所在する福祉施設です。絵画・創作・オリジナルグッズ製造・展示販売やパフォーマンス活動を行っています。

今回開催される「障害者の学びの場づくりコンファレンス in AICHI」では、オンラインで視聴されている皆さんにも、studioCOOCAと横溝さやかさんの創作活動の様子が伝わるよう、紹介ムービーを配信します。



2. 紙芝居

オリジナルのキャラクターが登場する自作紙芝居は、横溝さん自身が声色を変え、何役もこなしながら読み聞かせを行います。紙芝居の創作をはじめから早10年以上。数多くの作品の中から、今回披露するオリジナル紙芝居は代表作「ピ・ヨンジュとオレ三世シリーズ」です。お楽しみに！



※文部科学省スペシャルサポート大使について

文部科学省では、共に学び、生きる共生社会の実現に向けた障害者の多様な生涯学習の推進に関する全国的な普及・啓発を図るため、横溝さやかさんを含む8名の著名人を「スペシャルサポート大使」に任命（下記参照）し、広報活動やイベントにおける講演等への協力をいただいています。

「スペシャルサポート大使」には、障害者スポーツや文化芸術活動を含む、障害者の生涯を通じた多様な学習を支援する活動を行う際にも協力を得て、この理念の全国的な普及・啓発を図り、共生社会の実現に向けて、取組を進めています。

- ・東ちづるさん（女優／一般社団法人 Get in touch 理事長）
- ・有森裕子さん（公益財団法人スペシャルオリンピックス日本理事長）
- ・大日方邦子さん（一般社団法人日本パラリンピアンズ協会会長）
- ・金澤翔子さん（書家）
- ・河合純一さん（一般社団法人日本パラリンピアンズ協会理事）
- ・川島成道さん（ヴァイオリニスト）
- ・横溝さやかさん（イラストレーター）
- ・レモンさんこと山本シュウさん（ラジオDJ）

成果報告（１） 「生涯学習セミナー」

辻 浩（名古屋大学教育学部教授）

1. 2018年度（1年目）の取り組み

本事業の1年目の取り組みでは、「公開講座」に取り組んだ（2年目から「生涯学習セミナー」として実施）。

テーマを「私もあなたも Happy Life～考えよう！生涯輝き続けるために～」とし、次のような3回のプログラムを実施した。

第1回：今までの Happy 探し～過去にはやさしく～

第2回：生涯輝き続けるために～未来は楽しく～

第3回：いつでもどこでも誰でもが学べる社会～北欧の教育事情から学ぶ～

第1回では、自分のこれまでをふり返ることがめざされ、第2回では、自分の未来に思いを馳せる機会をつくることめざされた。そして第3回では、生涯学習がすすんでいる北欧の話聞きながら、これからの日本社会を展望することがめざされた。

このようなプログラムにするにあたっては、青年期の課題として、自分のこれまでを見つめ自己理解を深めることが大切だと考えたが、準備会の中で言われたことは、そのことで自己を肯定的にとらえることができるようにしたいということであった。そのようなことから、これまでの生活をふり返る時には、うれしかったことを思い出すことを中心に考えるとともに、未来のことを考える時にも、実現可能性はあまり考えず夢を語ることを大切にしたい。また、自分たちで話し合うだけでなく、講師の講演も聞けるようにしたいが、どうすればいいかということが検討された。その結果、短い講演を聞いた後、グループで感想を出し合って、そこから質問を考えて、それにこたえてもらうことになった。

第1回と第2回は、6人くらいのグループでのワークショップ形式にし、個人でワークシートに記入する作業やグループ内での発表、全体会での発表を組み合わせた。作業の工程を一纏めにせず、細かく区切って説明を行い、うまく作業や発言ができない参加者については、グループに配置した支援者が対応した。また、第3回は、講演を聞いた後、グループで話し合って、質問を考えることに取り組んだ。ここでも、話し合いをすすめ質問に練り上げている過程に支援者がかかわった。

2時間のワークショップが成り立つか心配されたが、ゆったりとした進行の中で、その人なりのワークショップの参加ができ、障害のあるメンバーからは、ワークシートに書くのが楽しかった、自分のことを話せてよかった、みんなで私の夢を考えてくれたのがよかった、他のグループの報告がうまくできてよかった、外国の障害者の大学を知ることができてよかった、といった感想が寄せられた。また、支援者としてかかわった大学生・大学院生も、これまでの自分をじっくりふり返って人に聞いてもらったことがないけれどその大切さがわかった、意見を出しにくい人の話もじっくり聞ける空間に居心地のよさを感じた、その人の言葉を周りにどう伝えたらいいか迷ったがそれもいい経験になった、といった感想が寄せられた。

2. 2019年度（2年目）の取り組み

1年目は「公開講座」と銘打ったにもかかわらず、「NPO法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会」が母体の見晴台学園や見晴台学園大学の生徒・学生以外の参加者が限られていたことや、同会が運営する自立支援センターのメンバーと一緒に活動することで高校から社会人までの交流の場にしたいということから、「生涯学習セミナー」として開催することになった。

「生涯学習セミナー」では、障害のあるメンバーと職員、支援者で実行委員会をつくって企画や運営を行った。実行委員会は8回開催され、参加者が対等な立場で考えを出し合うことを原則にしながらも、障害のあるメンバーへの職員による必要な働きかけも行われた。また、実行委員は次のような役割を分担し、それにとまなう係ごとの相談も行われた。

実行委員長：実行委員会の司会、セミナー当日の挨拶、まとめと報告
副実行委員長：実行委員長の補佐
事務・総務係：実行委員会の開催、予算管理
広報・宣伝係：チラシの作成、アンケート用紙の作成・集約、当日の記録
会場係：会場作り、会場誘導、名簿・名札の作成
運営係：防災グッズ作りのデモンストレーション、景品準備、下見、当日の受付

このような企画や運営に携わったことを障害のあるメンバーは、「司会をするのは、すごく大変でしたが、みんなと協力して4回のセミナーを企画してきました。私にとってセミナーをやることは、すごく大変なことだったけど、参加してくれる人たちが楽しかったと思えるセミナーができたと思います。学園で授業をしてる時とは違い、るっくや大学の人たちと話ができるのでとても楽しいです。みんなと楽しい企画が作れてよかったです。実行委員長をやってみて、みんなに意見を聞いたり、企画を考えたりするのは大変だったけど、とてもいい経験になりました。」「準備することが大変でした。雨の中の下見がたいへんだった。みんなでしおりを作っていたいへんだった。でも、みんなが楽しんでくれてうれしかった。とてもよかった。」「みんなで話し合いしたら、ジブリの歴史、川柳など沢山の意見がありました。その中で自分の意見の地震、防災についてセミナーができてうれしかったです。またやってみたいです。次はジブリの歴史を学びたいです。」という感想を寄せている。ここから、大変なこともあったけれど、みんなのためにがんばり、みんなが喜んでくれたことで報われるという関係性の大切さが見て取れる。また、複数の提案の中から自分の提案が選ばれたことを喜ぶとともに、次の機会には他の人の提案したものを学んでみたいという意見があり、仲間の意見を尊重し、それにも共感できる気持ちが育まれていることは重要である。

また、障害のあるメンバーを実行委員会に送り出した自立支援センターの職員の立場から、「職員に声をかけられての始まりでしたが、セミナー実行委員会を重ねるごとに向かう足取りも軽く楽しげに出かけるようになりました。生涯学習セミナーが“なぜ必要なのか？”という問いに確固たる答えはありませんが、最初は、与えられた役割を受け取る側だった彼女たちが次第に意欲的になり、楽しい勉強になった事、次に学びたい事を発言したことは、委員になった当初は、思いもしなかったこと、普段は自分の思いを表現し伝えることが苦手な彼女たちの嬉しい変化でした。」という感想が寄せられている。与えられるだけでなく企画づくりに参加したことで、普段のセンターでの作業や生活の中では見られない、楽しそうで意欲的な姿になったことが評価されている。

このような学びの場にもなった実行委員会での話し合いでは、プログラムの内容を、スポーツ、学び、文化を楽しめるものにする事が確認され、それにもとづいて、次のような4回のプログラムが実施された。

- | |
|---|
| 第1回：防災教育～みんなで一緒に生きのびよう！～ |
| 第2回：カローリング大会～名古屋発祥のスポーツで楽しもう～ |
| 第3回：パラリンピック選手に聞くパラリンピックの魅力～河合純一さんに聞く～ |
| 第4回：国宝犬山城・歴史散策～国宝が1つの町にふたつも！欲張り犬山城下町散策～ |

このような生涯学習セミナーに参加しての感想は、楽しかったというものが多かったが、「今までの学校の勉強と比べてみてどうでしたか？」という問いに対して、「小学校のときの勉強はすきだった。中学校のときは、もう忘れてしまった。高校のときは、仕事の練習をやっていた。だからあまりすきな勉強ではなかった。セミナーは楽しかったし、学んでよかったと思った。」「小学校とか中学校とか養護学校とかでは、たくさんの授業をしていました。私は勉強が好きでした。セミナーもがんばりました。楽しかったです。私は、もっと学びたいです。」という感想が寄せられている。ここには、学校ではたくさんの授業があり、小学校の時には楽しかったものの、次第に職業訓練が中心になって楽しさが失われていったが、生涯学習セミナーでは学びの楽しさを取り戻している様子が見える。

また、自立支援センターの職員の立場から、「利用者との日々の関わりの中で彼らの世界の狭さを感じるがあります。(中略)何かをやりたいと思ってもお金がなかったり、一人では外に出る自信がなかったり、なかなか行動に移せません。そもそも自分が何をやりたいのかわからない人もいます。圧倒的に経験が足りないのです。(中略)セミナーの内容に興味を持って真剣に参加していた利用者もいますが、『面白い話が聞けて楽しかった』『みんなと美味しいものを食べてよかった』と純粋に楽しかったという感想が多く聞かれました。私は、セミナーの内容をしっかりと理解して知識として吸収することが『学習』だと思っていましたが、そうでない場合でも、みなさんが『経験した』ということが何より学習になっているのだと感じました。」という感想が寄せられている。ここでは、狭い世界に閉じこもりがちになる障害のあるメンバーにとって、生涯学習セミナーで「経験」を増やしていくことが重要な「学習」であることが指摘されている。

3. 2020年度(3年目)の取り組み

3年目は2年目を踏襲して、実行委員会を設けて生涯学習セミナーの企画をつくり、次のようなプログラムになった。

- | |
|-----------------------|
| 第1回：ポッチャ大会 |
| 第2回：イラストの作品鑑賞と話し合い(仮) |

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大という状況の中で、実施回数を少なくせざるをえず、実行委員会もセミナー当日も感染に注意を払いながらすすめることになった。

また、イラストの作品鑑賞と話し合いでは、オンラインで実施するという選択肢も含めて、どのようにすれば100人規模の企画にすることができるかを話し合った。この機会にオンラインでの実験を行うことも考えられるが、生涯学習セミナーが障害のあるメンバーにとって大きな楽しみであ

ることから、招聘することになっているイラストレーターと実行委員会で粘り強い交渉がなされている。

4. 生涯学習セミナーから見える「学校から社会への移行期」の学びの課題

以上の3年間にわたる生涯学習セミナーの取り組みから、障害のあるメンバーの「学校から社会への移行期」の学びの課題として、次のようなことが見えてきた。

①企画・運営を行う実行委員会も学習の場として大切にすること

実行委員会に参加することは、大変だけどみんなのためにがんばる、自分の意見を言う、他の人の意見にも共感するなどの意義がある。難しいことは職員が担うことになることもあるが、できることをすることで、意欲が湧き、楽しい気持ちになる。

②あらたまった場のもつ意味を大切にすること

実行委員会やセミナー当日の開会あいさつ、それぞれの役割の遂行などは緊張する場面ではあるが、普段の生活とは違いみんなから注目されることで、大きな達成感を味わい自信につながる。

③自分の人生のふり返りは肯定的なことに気づくことを中心にすること

自分を見つめることは青年期の課題として大切ではあるが、そのことで自信が芽生え、明るい気分になるために、うれしかったことや誇りに思っていることなど、肯定的なことに注目することが必要である。

④ワークショップは個人での作業とみんなに聞いてもらうことを組み合わせること

個人の作業のために使いやすいワークシートを用意し、自分が書いたものを使いながら発表することが望ましい。また、ワークショップの進行の指示は細かく区切って出すことで、変化があつて飽きずに取り組むことができる。

⑤講演についてはグループでの話し合いを通して質問に練り上げること

講演を聞くことは集中力が続かず難しい面があるが、講演を受けてグループで話し合う中で質問に練り上げていくことで、内容を咀嚼することができ、講師との応答的な関係もできて満足度が高まる。

⑥新しい経験、楽しい経験をすることも大切にすること

障害のあるメンバーの日常生活は変化に乏しいことが多いので、知識を身につけることだけを学習とは考えず、新しい経験や楽しい経験をすることに、世界が広がるという積極的な意義を認める。

⑦日常の生活の場での信頼関係を基盤にすること

学校や職場など日常の生活の場での障害のあるメンバー同士や職員との信頼関係があることで、あらたまった場で新しいことをすることに少し緊張するけれど、参加してみようという気持ちになる。

⑧職員も支援者もともに学ぶこと

自分の人生をふり返り肯定的に自己をとらえることは職員や支援者にも必要なことである。また、障害のあるメンバーが実行委員会やセミナーで見せる普段とは違う態度からその人の理解を深めることも可能になる。

成果報告(2)

「大学連携オープンカレッジ」

杉山 章(東海学院大学人間関係学部子ども発達学科・准教授)
藪 一之(見晴台学園学園長)

I. 三カ年の「大学連携オープンカレッジ」の取り組み

委託事業がねらいとする学校卒業後の障害青年のための学習プログラム開発を目的とした実践研究として大学連携オープンカレッジが大切にしたのは、①異なる大学間の連携、ネットワークを構築し共同でオープンカレッジを運営・開催すること、②学びたい障害青年と同世代の大学生等支援者が対等な関係で協力し合える取り組み内容をつくること、の二点である。以下、三カ年の大学連携オープンカレッジの概要とその構造化、課題についてまとめてみた。

1. 2018年度(1年目)

1年目は連携協議会委員として本事業に参加した大学教員の協力を得て地域の五大学等(名古屋大学、愛知県立大学、東海学院大学、中京大学、愛知みずほ短期大学)と事業実施団体のNPO法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会が運営する見晴台学園大学校、見晴台学園高等部専攻科が相互に訪問する形で「大学間交流授業」(計5回)を実施し連携を計った。

並行して取り組んだ大学連携オープンカレッジは、書家で文部科学省スペシャルサポート大使の金澤翔子氏を招き揮毫と講演会を企画した。オープンカレッジは講演会を挟む形で開催し、第一回は金澤翔子氏の活動を動画で学び、講演会の進行を確認した上で当日の役割を分担した。第二回が講演会で、障害青年と学生ボランティアが会場設営、受付、司会、質問係などの役割を務め、見事に講演会のもう一方の主役として活躍した。第三回は講演会を終えての振り返りと次年度のオープンカレッジへの希望を出し合った。

2. 2019年度(2年目)

1年目の成果から障害青年と学生ボランティアが協力して役割を担う活動が彼らの学習意欲を高め、達成感の獲得につながる点に展望が開けたことを受けて、2年目は自分たちが教える立場で子どもたちと関わるキッズワークショップを企画した。紙飛行機作家で連携大学の東海学院大学教授アンドリュー・デュアー氏を講師に、第一回はデュアー氏が日本に来て現在に至る生き方を民放の番組で鑑賞、紙飛行機が飛ぶ原理を講義形式で学んだ。第二回はキッズワークショップに向けて子どもたちに教える紙飛行機をまずは自分たちが作って飛ばしてみることを中心に、当日のグループや役割を話し合って決めた。第三回がキッズワークショップ本番で、当日は名古屋市瑞穂児童館の協力で幼児・小学校低学年の子どもたちと家族34名を迎えた。障害青年と学生ボランティアは子どもたちに楽しく参加してもらえるよう会場設営や横断幕製作、受付などの役割を担い、さらにグループに分かれた子どもたちがデュアー氏の指導で紙飛行機を制作、思い思いに飛ばして遊ぶ場面では子どもたちを支援する立場で活躍することができた。第四回は当日の様子を写真で振り返り、改めて紙飛行機を作って交流した。

3. 2020年度(3年目)

新型コロナウイルス感染拡大の先行きが見えないため、継続発展させたかったキッズワークショップの企画を断念、大学連携オープンカレッジそのものの開催も危ぶまれたなかで第一回をオンライン開催で行うこととした。内容は前年に引き続きデュアー氏を講師に招いて紙飛行機がテーマである。普段の活動拠点の学校、事業所4箇所をzoomでつなぎ、紙飛行機の講義と制作を行った。障害青年と支援者がオンラインで交流できるのかが不安視されたが、互いの学校紹介や画面越しに飛行機を飛ばす様子を見て歓声をあげるなど、同時間を共有する取り組みとして成立できた。反面、役割を持って主体的に参加する点では事前準備に工夫が必要であった。第二回は感染防止に最大限考慮した対面形式で行い、オンラインで作った紙飛行機を持ち寄って交流のきっかけとし、混在したグループで新たな紙飛行機制作し関係を深めた。

4. 大学連携オープンカレッジが示す学校卒業後の学びの可能性

下図は3カ年の取り組みから大学連携オープンカレッジのモデル化を試みたものである。障害青年と学生ボランティア等支援者は講義やグループワークで一義的な学習に参加する。そこには連携大学の支援協力を得て青年期の興味関心に寄せた学習内容や人材の提供が可能となる。障害青年は支援者の学生ボランティアと共に学習活動に参加し、同世代青年同士の交流を通して学び合う関係を構築していく。そこで学んだ成果を演習で発揮し、役割を担って主体的に演習に取り組むことで学びを一層深化させ、達成感や自分への自信を得ることができる、というイメージである。

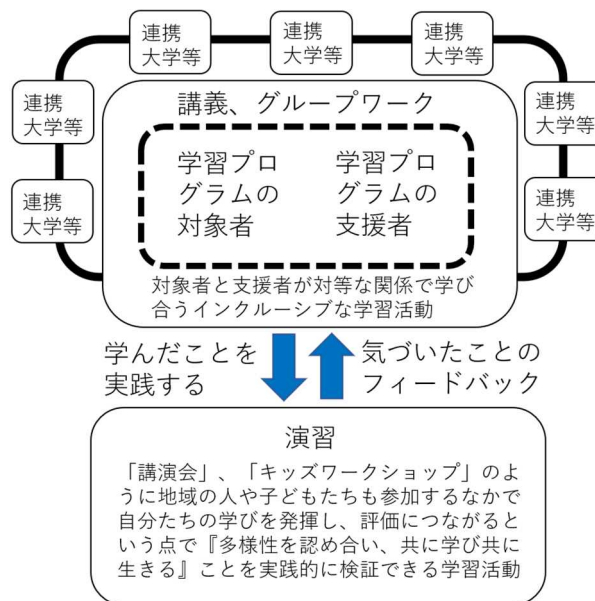


図 大学連携オープンカレッジのモデル

わせて

コロナ禍のため最終年度の課題としていた連携大学との関係提携やキッズワークショップの定例化が実現できなかったことは悔やまれるが、集団での交流が再び可能となった将来、大学連携オープンカレッジモデルが学校卒業後の障害青年の多様な学習活動の一例として地域の実情に合普及する可能性は大いにあると言える。

5. 大学連携オープンカレッジに参加した大学生の意識

共に学ぶ大学生は、どのように感じているのか振り返る。日常の講義の中で、学生に過去の交流及び共同学習の経験を聞くと、学生によって経験に大きな差がある印象を持っている。

(1)2018年度

大学間交流授業より(東海学院大学)

- ・授業・目的:保育実習指導 I(演習):乳児への対応を学ぶ:ベビーケアモデルを用いて、乳児ケアを学ぶ。授業後、カフェコーナーで交流会を実施した。
- ・授業の様子:3 グループに分かれ、それぞれベビーモデルを用い、抱き方とオムツ交換を体験し、抱き方や男女によるケアの違いについて学んだ。その後、学びや感想等を交流した。
- ・ワークシートより

学生:「人によって乳児への反応が異なることが分かった」「教えることもあり、自分の中により詳しく入った」
「自分が普通にできることができない(難しい)人があるし、その逆もある」

障害学生:「ウンチのケアは男の子と女の子でふきかたがちがうのでむずかしかったです」「おもさがあって命をあずかることが必要などうさもあることがよくわかりました」「ぼくはべんいのものにすでにさわるのがにがてなのですが赤ちゃんのおむつがえがだいじなばしょのえいせいめんやびょうきにならないためのとてもだいじなさぎょうなのだというのがわかりました」

(2)2019 年度

全四回について、大学生(東海学院大学)に、関わりや気付きについてアンケートを実施した。

第一回

「よく話しかけてくれた」「会話をしているととても楽しかったと感じた」

第二回

「飛行機一つでもその人なりのこだわりっていう物を理解し合えた」「飛行機を飛ばしてる時に一緒に飛ばしてみたりして楽しかった」「出来そうかどうかを聞いたりして、関わろうとすることができたと思う」

第三回

「昨年に引き続きの参加ということで、自分の中で顔や名前が一致している方が多く、積極的に話すことができた」「見晴台の方々も紙飛行機作りを子どもたちに教えようとしており、準備から活動までその想いが実現できるように声をかけたり保護者や子どもたちと繋ぐことができるようにと考え関わりました」「多くの人と関わる中でも緊張するのは皆同じでお互いに自分の持ち味を出しながら他者と関わっていた」「地域の方や保護者の方が彼らに向けた疑問や戸惑い好奇の目などを取り払い、両者をうまく繋ぐために私達学生や関係者が何をできるかを考えていかなければいけないと感じるきっかけになりました。」

第四回

「様々な人の得意不得意というものへの理解や、互いに認め合い、そして助け合うことがコミュニケーションをとっていく中で可能になるんだと気づいた」

(3)2020 年度

オンライン交流後にアンケート(Web 回答と質問紙の選択。同内容)を実施した。アンケートは授業内容や交流及び共同学習、交流相手への意識、活動について尋ねるものであった。下記は第一回の事後アンケート結果の一部である。

図1 講義内容（紙ひこうき）

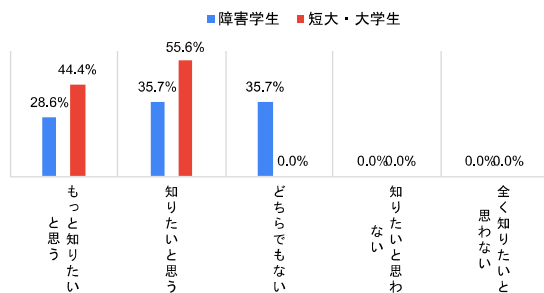


図2 オンライン交流

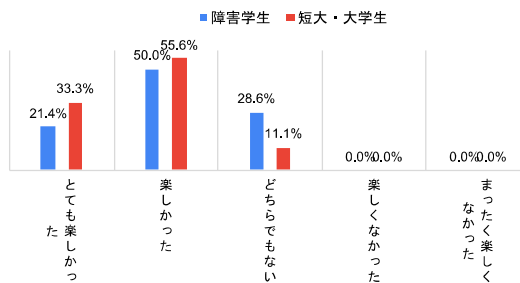


図3 自己紹介

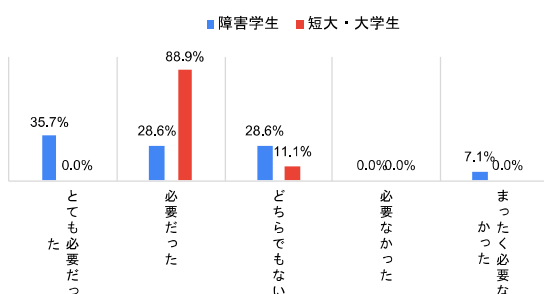
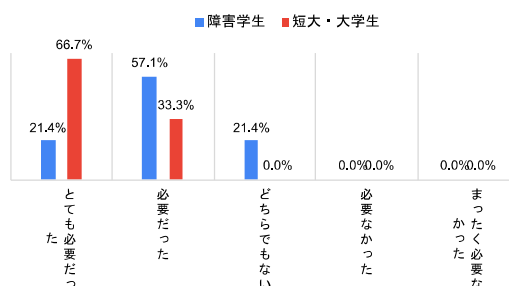


図4 紙ひこうき飛ばし



<考察>

2018 年度の実践から、学生は、人の多様性について考える機会や自身の学修が深まる機会になったことが窺えた。障害学生の記述からは、配布物や授業の形態や課題提示の配慮により、全員ではないが、ねらいに沿った学修をすることができる可能性を感じた。

2019 年度の実践は、日常的に関わりが少ない学生と障害学生が第三者を対象にしたワークショップを運営する取組であった。学生にとっては、回を重ねるごとにお互いの理解が深まったと考える機会となったり、第三者が参加することで、広い意味で対人援助に関わる専門性を考えたりする機会となったことが窺えた。

2020 年度の実践は、第二回目の実践前であることから、事前事後の比較は今後の課題とする。図1や図3、図4から障害学生を対象とする講義は、非常に難しいが他の実践者によって語られるように当事者性の観点が重要だと考えられる。反面、図2からオンラインによる実施は、障害学生も学生も同様に楽しめたと考えられる。

<事例検討のねらい>

1970年代に、学校教育卒業後の障害者の学びの場として、障害者青年学級や青年サークルが全国各地で取り組まれました。それは、①障害児学校や障害児学級の同窓会から発展したもの、②公民館など公的な社会教育施設で取り組まれているもの、③親や施設職員が子どもたちのために開設したものなどです。

今から30年前、18歳以降の知的障害者の学校教育は、私立の養護学校に高等部専攻科が存在するのみでした。同時期、東海・北陸ブロックにおいては名古屋市にて、行き場のなかった子どもたちのために親たちが中心となって5年制高校「見晴台学園」が開設されました。

こうした高校（高等部）3年間だけでなく、もっとゆっくり学びたい・学ばせたいという願いに応えようとする実践は、その後、後期中等教育の延長をめざす「専攻科づくり」運動として取り組まれるようになりました。今日、学校教育だけでなく、障害者福祉事業を活用した「福祉型専攻科」として広がってきています。本事例検討会は、そうした歴史のうえで展開している実践事例に注目したいと思います。

今回の実践報告は、①学校から社会への移行期の学び（高等部専攻科）、②学校から社会への移行期の学び（福祉型専攻科）、③ライフステージに応じた学びの三つの柱からなっています。これらに共通するキーワードは、「青年期」「自分づくり」「仲間」「自己肯定感」「生涯の学び」などです。

知的障害のある人たちにも青年期は訪れます。子どもから大人へと向かう青年期は、それまでの人間関係が親から仲間へと移っていきます。仲間との関わりは人間関係を学ぶうえで重要なだけでなく、また自分自身に目を向け、新たな自分に気づききっかけともなります。そのなかで、葛藤や不安、失敗を乗り越え「自分らしさ」を身につけ自立に向かっていきます。このような青年期の発達的特徴を理解した上での教育的支援が求められます。学校卒業後の「ゆっくり、じっくり、自分らしく」を大切にした青年期の学びは、その後の人生に大きく影響します。

参加者の皆さんには、各実践は、①障害者が学びの主人公になり、自己肯定感を得ることができているか、②学びの主体にどのような内面的変化が現れているか、③その学びの機会はどのような条件のもとで設置・運営されているか、などについて検証していただき、障害青年の学びや生涯学びつづけることの意義や課題について討論し、深めていただきたいと思います。

（コーディネーター・プロフィール）

小畑耕作

現在、大和大学教授。前職は特別支援学校の教員。障害者青年学級を現在まで30年近く取り組んでいる。全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会副会長。全国障がい者生涯学習支援研究会副会長。

井口啓太郎

現在、文部科学省 総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課障害者学習支援推進室 障害者学習支援第一係係長。前職では国立市公民館において「しょうがいしゃ青年教室」事業や「喫茶わいがや」の実践に関わる。2018年4月から国立市より文部科学省へ出向。

(事例報告 A①)

学校から社会への移行期における学びの重要性について

特別支援学校聖母の家学園専攻科の取り組み

辻 正

(特別支援学校聖母の家学園 教諭)

【趣旨】

特別支援学校高等部は小学校から始まった最後の学びの場になっています。生徒達はかつては中学校を卒業して職場へ巣立っていきましたが、今日殆どの生徒は高等部へ進む時代になりました。しかし「学びの場」であるべき高等部教育は学校から社会への移行期にあたるため職場実習に明け暮れる学校生活になりがちです。高等部の3年間の時間は人格形成における大変重要な時期になります。青年期における不安も成長と共に広がっています。職場実習はともすればこのような時期に取り組みされる事が多いのではないのでしょうか。専攻科設置の頃のケースと、4年間専攻科としてのケースを通して学校から社会へ向かう青年期の学びの重要性について報告をしたいと思います。

【概要】

1. 本学の歩みと特徴

1971 (S46) 年に三重県で初めての施設内養護学校として開校し、1987 (S62) 年に高等部を設置して3年間の高等部教育に取り組んできました。生徒たちの実態や保護者の願いや「障がいを持った青年にも豊かな青年期教育を保障する」という理念に基づき、高等部本科卒業後の2年間を対象に1995 (H7) 年に高等部専攻科を設置し、教育実践を積み上げてきました。開設年より24年間で268名の専攻科の卒業生を送り出すことが出来ました。また本校の専攻科は県内外の他校の高等部卒業生89名(1996年度～2020年度)も受け入れてきました。生徒達は、2年間の専攻科教育を経て社会へ進んでいくのですが、この20数年の間に発達障害の生徒の増加が顕著となり、スキルはあっても対人関係での躓き、自己肯定感の未発達などから就労が持続できないケースが見られるようになりました。この現実から社会へ適応するためにより時間をかけて彼ら自身の成長や発達を見守り支援していく期間の延長の必要性を感じました。そこで障害を持った青年に自らの「尊厳ある生活」を創り出す教育の場を提供するために自立に向けた就労教育だけでなく、社会に貢献するための就労や社会活動を考えることで相互に支え合う関係性を学ぶ場として専攻科4年制を計画し、障害者権利条約の批准や障害者差別解消法など国の制度や、さらなる教育年限延長を求める運動の高まりを受けて、2017 (H29) 年に専攻科4年制(本校では専攻科1・2年と分けて3・4年をNEXTと名付けました)をスタートさせました。

2. 専攻科2名のケースより

最初に紹介するケースAは、専攻科2年制1期生の生徒です。地域の中学校特別支援学級から高等部に入学しました。いろいろなことに興味を示し特に音楽が大好きな生徒で、公共交通機関で自

主通学していました。高等部に入って友だちの輪が広がり、好きな異性もできて文字通り青春時代を生きていました。しかし、職場実習では作業に集中することができず、途中でリタイヤすることがありました。保護者は一般就労を強く望んでいて、進路懇談会がハローワークで持たれました。出席者の中に中学校でAを送り出した担任の先生がいました。その先生は、「私はかつて彼の就労に向けてかなり厳しく指導しました。しかしそれがかなわず高等部へ進学することになりました。卒業してからも何度か彼に学校での様子を尋ねました。彼は『学校が楽しくて本当に幸せだ』といつも話してくれました。私は今、不登校の生徒を支援する部署で勤務しています。彼の『学校が楽しい』ということがとても大切だと身に染みて感じています」と話されました。この懇談会の後で保護者の方も「私たちも本人の思いを尊重していこうと思います」と今までの考え方を180度変換していきたいと話されました。その後高等部に専攻科が設置され教育年限が2年間延長されました。Aは、専攻科在籍中から本校のバンドに入り、地元の授産施設で働きながら本校のバンド活動と青年サークル、また地域のゴスペルグループにも入って生活を楽しんでいます。このAと同じ中学校の特別支援学級から卒業後一般就労した彼の友人は1年後に職場を辞め、自宅に引きこもっていました。Aは彼を心配して高等部の行事に誘ってくるようになり、高等部には入学しませんでした。本校の青年サークルにも入り、彼と共にバンドの中心メンバーとなって今日に至っています。

もうひとりのケースBは、県外の特別支援学校高等部を卒業し、専攻科へ入学してきました。毎日の通学は困難なため、本校寄宿舎を利用しました。Bの出身校は、本校への入学者が群を抜いて多い県外の特別支援学校です。この高等部は1998（H10）年に初めての入学者を本校が受け入れてから進路の選択肢の中に専攻科が入って見学～説明会参加～体験入学・体験入寮というコースを設けています。Bもこの進路コースで本校に入学しました。本校の寄宿舎は、週初めに早朝家を出て公共交通機関を利用して登校します。そして一週間寄宿舎で過ごし、週末に帰ります。地域を離れ、社会へ出て行くこの年齢でこのような体験を積むことはとても大事なことだと思います。

Bを担当した教諭によると「障害の程度は軽度で、スポーツ万能で礼儀正しく、しっかり者というイメージだったが、自分の気持ちをうまく表現できず精神的に不安定になることがあり、教室を飛び出して誰もいない場所で泣いていたり、気持ちはあってもいざという時に前を向くことが出来ない場面も多くみられた。またそういう部分をB自身がよくわかっており、自分の弱さとして口にすることもあった。特に専攻科3年生（NEXT）に入ったあたりでは、環境やカリキュラムの違いになじめず、授業に入れず逃げてしまう場面が見られた。そこで、毎週1回『進路を拓く』というプリントを用意して担任と話し合いながら今後について考える時間を取った。3年生の春の段階で彼の希望は3つ。①一般就労したい②グループホームで将来暮らしたい③自動車免許を取りたい。保護者の方ともこの思いを共有しながら、まずは自動車免許を取ることに挑戦したが、一度も行けずに挫折してしまった。しかしそのあとゆっくりと時間をかけて考え、まずは身の文に合ったことにしっかりと向き合うという考えになった（進路ニュースより抜粋）」とのことです。専攻科4年制の教育課程は始まったばかりで手探りの実践でしたが、学校から地域へという様々な学びを通して新たな自分に出会い始めていきました。また最終学年では週3回、地域のスーパーでバイトをし、一度の遅刻もなくやりきることができ、この体験は大きな自信につながったようです。将来的な目標は一般就労だけれど、4年修了段階での自分には難しいと彼自身が判断し、自分を高める時間を

さらに取る（就労移行へ）ことを選んだのでした。3度の実習を経て、無事に内定になり、卒業していきました。ヘルパーの資格を取るために勉強に励み、資格を取ることができました。そして運転免許に再チャレンジしています。

※専攻科4年制の実践については近く発行予定の全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会の『障害青年の学校から社会への移行期の学び』をぜひお読みください。

3. 学校から社会への移行期における専攻科の意義

全国で福祉制度を活用した学びの場が広がっています。学校から社会への移行期にゆっくりと時間をかける取り組みの大切さを感じます。本校に専攻科が設置された頃は、高等部3年間に全てを集中させていくシステムから時間をかける事について「先延ばし」という雰囲気がありました。私は平成元年から専攻科設置の前年まで進路の担当でしたが、本人の希望を育てていく余裕もない中で職場訪問～見学～実習という計画を組んでいきました。「もう少し時間があれば学習に興味を持てる!」という感触を持ちながらも、卒業式までの期間で職場実習を組まざるを得なかったこともありました。学校は学ぶ場というより次の選択を考える場という形になっていたとも言えます。現場実習を否定するのではありません。学ぶ場である以上、実習は仲間と見学を中心として社会的な経験を増やす事が大切だと思います。本校の専攻科を準備していく中で同じ私学の神奈川聖坂学園の当時の柴田校長をお招きして開催した研修会の講演タイトルは「障害児にも青春時代を!」でした。高等部は彼らにとってかけがえのない青春の日々なのです。本校も専攻科が設置されてまず高等部3年間が変わり始め、職場実習の短縮により仲間と共に学ぶ時間が拡大しました。高等部3年間と専攻科2年間の5年間教育の中での挑戦が始まりました。この高等部本科専攻科の教育課程づくりについては『養護学校専攻科の挑戦 高等部5年間教育』（1999年かもがわ出版）をぜひお読み下さい。高校生の大学進学率から考えても彼らを取り巻く現状はあるべき姿から遠いと思います。

専攻科1・2年では**※4つの学習の柱（演習・研究ゼミ・経済・生活講座）**を中心に青年たちは生き生きと活動し始めました。学習を進めるにあたって私たちが大切にしてきたのは、彼ら自身による話し合いです。障害の程度に関係なく、学習のいろいろな場面で話し合ってみんなで決めることで、より主体的に取り組めるようになってきました。意見を出し合うのもまとめるのも確かに時間がかかります。しかしこの時間が相互理解を深めていきます。仲間がいるから安心して取り組める。失敗してもうまくいっても経験を共有していける。自分で進路を考える環境が整ってきたのではないのでしょうか。このような環境づくりのためにはやはり時間が必要だと思います。障害者権利条約のスローガンは「私たちのことを私たち抜きに決めないで」ですが、専攻科ではこの視点で実践してきたと思います。

※4つの学習の柱（演習・研究ゼミ・経済・生活講座）

演習	話し合いをする力や協力して取り組む力をつける 校内模擬喫茶店『マリアハウス』・宿泊学習『ライフステイ』・学園祭・クリスマスパーティー・成人を祝う会の企画・運営お楽しみの企画・運営
研究ゼミ	好きなもの興味のあることについて研究しその成果を発表する 研究発表会での発表（2年生）校内発表会（1年生）

経 済	材料の仕入れ・製造・商品化・販売・売上金という経済活動を学ぶ 園芸 製菓 食品加工 3のコースがある
生活講座	伝統と文化（日本食、食文化、服装の歴史、世界の民族衣装など） ファッションと暮らし（身だしなみ、自分の身体のサイズなど） 環境と健康（環境汚染、バリアフリー、健康の学習など）

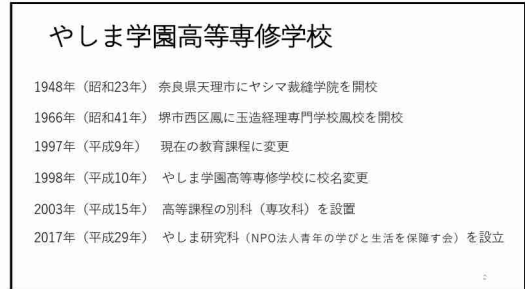
4. 今後の課題 学校から社会への移行期において

まず**学校・家庭・地域が連携して本人を支える学びの軌跡の大切さ**と思います。ケースAからは、学校の中で今をしっかりと学ぶことが大切だとわかります。「楽しい」ことも「つらい」こともあると思いますが、学校には仲間がいます。彼は学校で出会ったバンド活動に興味を持ちそれが生きる原動力になっていきました。ケースBからは高等部の3年間でも専攻科の2年間でも難しかった新しい自分との出会いを専攻科4年目に見つけました。すべての子どもたちが思春期を迎え、青年に成長していく道を歩んでいます。これが学びの軌跡だと思います。途切れない支援をどう準備していくのがとても大事です。しかし学びの軌跡はそのコースに本人を乗せていくのではなく、本人自身が切り拓いていくことによって次の時代を生きる原動力になっていきます。本校には障害の重い青年たちも学んでいますが、専攻科の実践を通して彼らが輝く場面を、大きな行事だけでなく何気ない学校生活の中で目の当たりにしてきました。ケースBは、寄宿舎を利用していたためBの成長を学校生活と寄宿舎生活の両面で感じました。学校という場所で一緒に学ぶ仲間とゆっくりと時間をかけることが必要だったのだと思います。専攻科がスタートして専攻科2年間の学びの4本柱を確立するまで時間はかかりましたが、専攻科4年制はまだ始まったばかりです。様々な教育実践にチャレンジしています。学校・家庭・地域での学びの中身が社会へ移行していく時期に本人の心の中にしっかりと自信となっていれば、社会へ出ていけると思います。専攻科4年制となって16年間の教育課程を考える土台ができましたが、学校から社会への移行期において、学校型や福祉型専攻科を含む青年期の教育が大事ではないでしょうか。2番目に**ライフステージを見通す進路保障**が大事だと思います。本校の卒業生の状況を見ていく時に大凡10年ごとに節目が訪れます。高等部を18歳で卒業して10年たったころに本人以外にも介護が必要になってきた家族の存在など、本人を支える家庭環境の変化があり、そのまた10年後にはグループホームなどを利用している卒業生も現れてきます。私たちは卒業後も職場訪問、同窓会活動、青年サークル、音楽バンドなどを通して本人や家族の方、関係機関と連絡を取りながら支援を続けていく重要性を感じています。そして3番目には**人生をより豊かに生きるための学び**を考えていくことではないでしょうか。本年6月に本校が準備したNPO法人聖母の家学園福祉会の生活介護事業所がスタートしました。卒業後の自立と社会参加の取り組みを開始しています。この事業所と本校は協働創造の取り組みを模索しています。働きながら生活を豊かにしていく福祉と教育の在り方を提案していければと思います。生涯を通しての学びを一緒に進めていきたいと思っています。

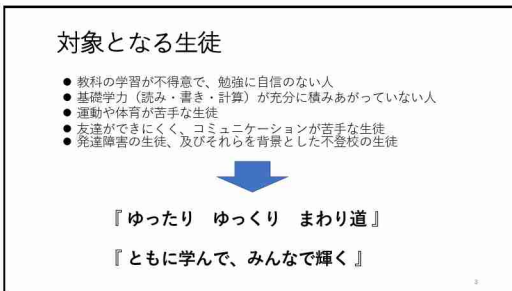
最後に2021（R3）年度、本校は創立50周年を迎えます。よりゆっくりと自分づくりを進めるために専攻科を開設し、教育年限の延長を行い16年間の教育課程を持つ学校となりました。しかしどんな学校もいつか卒業を迎えます。私たちは子どもたち青年たちとの教育の営みを振り返り、彼ら自身の成長を力にこれからも未来を拓いていきたいと思っています。



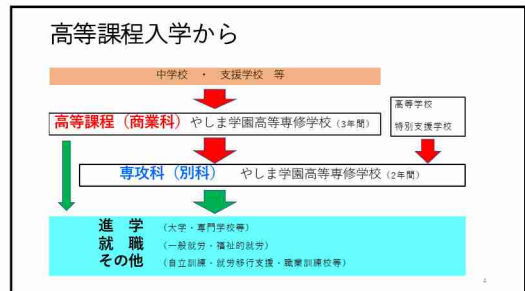
1



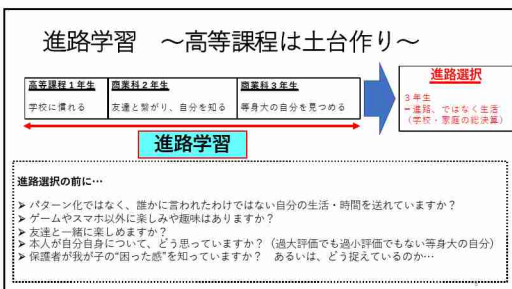
2



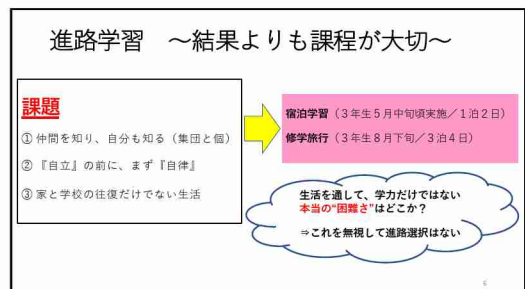
3



4



5



6



本校の修学旅行

7

令和2年度 高等課程3年生・修学旅行
 北海道（函館・ニセコ・洞爺湖・札幌）
 令和2年10月12日(月)～15日(木)

8

やしまの修学旅行は、
『食』に重点をおいています！！

9

『食』は“さまざまなこと”
 が垣間見られる

10

大沼公園
 名物は**大沼団子**ですが…

11

洞爺湖
 昭和**新山**

12

ニセコへ



13



14

普段 味わえない豪華な雰囲気での、
豪華な食事も食べ慣れていないので…



15

翌日の朝食、バイキングでは



16



味覚の広がりや共食は
identityの形成に
大きな影響をもたらす!?

17

宿泊や修学旅行の生徒の感想

一番楽しかった場所、あるいはしたことは何か。

- マクラ投げ…初めてあんなに友だちとさわげたから。
- クマ牧場…クマにりんごとかあげたりして、初めてできて、楽しかったです。
- モーターボートに乗ったこと…モーターボートに乗って、山が見えて写真を撮ったりしました。
- 部屋のメンバーで遊んだこと…修学旅行でやってみたくてできたから。とくにたのしかったのはようきでした。
- ジンギスカン(羊の肉)…ジンギスカンで肉おいしかったけどかたかった。ごはんをいっぱいおかわりした。
- ニセコ…絵を描くことが好きでガラスに絵を描くガラスリヨンが楽しかったです。ガラスに絵を描くことはむずかしかったし、時間はかかったけど周りが森でとてもおちついてかくことができとても良い思い出が出来ました。



18

進路学習や宿泊学習、修学旅行等を通して気付いた自分自身について

- ▶ きんちょうやたぬいきを少なくすること。私は大切なイベントの前はきんちょうしたりため息がおおくなったりしますそしてそれがめいまくになったりして。そうするとみんなが僕のきんちょうがうつるからです。
- ▶ 自分はまい日、おこられていることです。自分の課題はまだなくてどうやって自分の課題が見つかるか自分でかっつけたいです。
- ▶ 自分優先で動いていたこと。自分のことで頭がいっぱいであまり他人のことに目をむけられなかった。自分のことだけでなく他人に対してもかんがえないといけないと思ったので自分だけで楽しんでいる部分もあった。
- ▶ レンタサイクルでみんなに着いていくこと。レンタサイクルの自転車に乗って、ちゃんとみんなに着いて行って、最後まで止まらずにしました。

18

19

修学旅行から見えてくる“本当の課題”

- “成績”はいいが、指示がないと動けない
- 年齢相応の経験がない⇒同世代の友達と遊んだ経験や生活面等（内面の幼さ）
- 家族、特に母親と離れる不安感
- 生活感のなさ⇒数学は出来るが、買い物ができない
- 自分以外の他者の存在が薄い（自分理解、他者理解の低さ）



『困った感』がない

自分が何が好きて、何が嫌い…あるいは苦手かがわからない
(等身大の自分を知らない)

20

20

自分理解が進むと…

事例① Nさん
「修学旅行嫌やったけど…だんだん楽しくなってきた…」

事例② Iくん
「おれ、こんなもできひんのか!？」



ありのままの自分を受け止め、課題を認識

それが消去法ではなく前向きな進路決定に繋がる
そこに至るまでには**すべてを受け止めあえる仲間の存在**が必要不可欠

21

21

進路は“ゴール”ではなく、“スタート”

- 本校はあてがう進路はしません
- 本人主体で進路を考える
- 進路とは本校卒業後、『どう生きていくか』を考える
- 生活を含め、丸ごと自分をどう肯定的に受け止めるか…が大切

進路選択・決定は時間も勇気も必要

22

22

本校生徒には卒業後、働き甲斐や楽しみ、友達がいる**“豊かな生活”**を送ってほしい
そのための土台を作る手伝いをするのが学校と大人の役割



制度や進路先を知ることも大切ですが、
その前に**“本当に必要な力”…を考え直すことが重要。**

23

23



24

(事例報告 B①)

学校から社会への移行期の学びの場づくり（卒業後→学校）

小林 正尚

（きのかわ福祉会自立訓練シャイン支援員）

【趣旨】

高等部卒業後に「もっと学びたい」「友達が欲しい」「社会に出るのが不安」などの声を受け、青年期教育年限延長の願いから生まれた福祉制度を使って福祉型の専攻科を創ったのが、フォレスクールでした。それを見本にきのかわ福祉会きのかわ共同作業所内に自立訓練事業が開所しました。それから11年が経ち、8年前に単独事業となりました。

シャインは現在17名（1年次7名、2年次3名、3年次7名）で、日々の活動に取り組んでいます。目標は「自立した豊かな生活を主体的に営む力を身につけて社会に出よう」です。青年期を「ゆっくり、じっくり、自分らしく」仲間とともに、生活に特化した活動を通して自分らしさを出し、一人一人が輝いて生活することを目指しています。学校生活から社会生活に移行する「自分に自信を持ち、主体的に社会生活を送るための準備期間」ととらえて実践を進めています。

【概要】

1. プログラムについて

プログラム作成に当たっては、フォレスクール、高等部専攻科の実践を参考にしながら、青年たちの実態等を考慮しながらシャインのプログラムの原型を作成しました。目標に照らして、社会生活に必要なマナーやあいさつ、身近なことに触れる「社会生活プログラム」、基礎的な「経済社会」「コミュニケーション」、振り返り会、月一回の調理実習、さらには外部講師による「体操」「芸術」「英語」「手話」などの活動を作成しました。

さらに、一年間を通して取り組む「テーマ研究」をプログラムの柱の一つとしました。1年次は自分の住んでいる地域を調べ、自分の地域で知ってほしいところ、みんなに案内したいところなどを選んで案内する。2年次は自由テーマで、自分が興味関心のあることについて調べる、というプログラムです。

シャインの基本的なプログラムに変化はありませんが、それ以外の青年達から出た希望はできるだけ支援員が相談し進めています。自立訓練だからこそ、その思いが実現できるように、みんな考えて進めていけることを大切にしたいと思います。

青年期の課題である「自分づくり」視点を置き、青年期にふさわしい内容や青年たちのやってみたい活動内容を計画的に取り入れていきたいと思っています。

2. シャインの活動

前述のテーマ研究では、1年次のテーマ研究は、その人がリーダーとなって案内します。何度も試行錯誤しながら計画を立て、日程、移動手段、昼食場所を計画します。当日はもちろんですが、前日から緊張している様子が伺えます。計画にないことが起こった場合は、みんなで相談し、リーダーが決定します。それが選択する力、決定する力につながっていきます。

毎年2月にはテーマ研究報告会を開催します。報告会では準備、当日の司会をはじめ運営はすべて青年達です。一年間取り組んできたことを100人以上のお客さんの前で報告し、終了後はやり切った達成感で満ちています。この活動を通して、仲間意識、自己肯定感、自信が芽生えるように思います。

また調理実習は、グループ分け(3人ぐらい)をします。そのグループでメニューを決めます。

「僕はこれがいい」「私はこれを作りたい」という中でお互い折り合いをつけてメニューが決まります。レシピをPC等で調べまとめます。次は、チラシ等を見ながら予算立てを行い、前日に買い物に行きます。調理当日は、役割分担、調理の順序を声をかけ、協力し取り組みます。調理実習は、活動の中でも具体的かつ主体的な活動です。

その活動の広がりとして、利用者が自発的に取り組んでいるのが、2～3人で作る昼食づくりです。「ここで昼ご飯を作ってもいい？」との利用者からの希望から始まりました。自分たちでメニューを決め、買い物をします。支援員にヘルプがあれば手助けしますが、自分達で楽しく昼食づくりをしています。カレーライス、スパゲティ、どんぶり、野菜炒めなど少しずつメニューの幅も広がってきています。毎月の調理実習の取り組みが、このような主体的な活動に結びついています。

さらに、毎年行われている県下合同合宿、全国専攻科研究集会への参加は、青年達にとって楽しみのひとつです。ほかの事業所の青年達やいろんな人との出会いに喜び、シャインの仲間同士のつながりを深められる機会です。支援員にとっては、利用者の課題や新たな発見ができる機会でもあります。

また、地域の人から声をかけていただき、桃の箱折や柿作業に行かせてもらいます。希望や全員で作業に行きます。作業は自分のできることを見つけてそれに精一杯取り組むことができている。仕事を経験する貴重な機会です。就職させること、働くことが目標になっている教育現場がある中で、「助かった。ありがとう。」の言葉をもらい、役立つ自分、自分の存在感を確認できたのではないのでしょうか。体を動かし得た収入には満足感が感じられます。地域の人に喜んでもらえる充実感も感じられているように思います。

3. これからのシャイン

実践にあたり、自己開放、自己肯定感、他者受容、自己変革、達成感をキーワードに、「自己表現力を高める」「自分で考え、自分で決める」「生活する力をつける」「自分を知る」「自分らしく生きる進路を考える」「余暇活動を豊かにする」ことを学びの柱と考えています。-

青年達がいろんな仲間、人と出会い、またいろんなことを経験体験しながら、青年期をゆたか

にできる取り組みを進めていくことが、生涯教育につながっていくと思います。

【結論】

30年前に小規模作業所を立ち上げ、その10年後に法人認可運動に取り組み、その運動が実を結び、障害者の働く場を実現してきた先達の方々のお陰で、今があることに感謝したいと思います。そして、教育年限の延長の実現に向けて、「専攻科を考える会」を立ち上げ訴えてきましたが実らず、10数年前に自立支援法の福祉制度を使って福祉型専攻科が創られました。この長い年月を経て、福祉が教育年限の延長を実現してきました。その福祉型専攻科、自立訓練事業が始まってはや13年。その取り組みが評価され全国に広がっています。そして国は今、「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する事業」を3年前から始めました。生涯学習の観点からいろいろな取り組みをされています。社会福祉法人一麦会のゆめ・やりたいこと実現センターの取り組みの中で、「夕刻のたまり場」を毎週水曜日に開催し、集える場を作りました。仕事が終わってから行き場のなかった人たちが集える場となっていった。仲間と話ができる、仕事の愚痴が言える、など、「ここに来れば何かできる」という場所となりました。

シャインもそのような場所であり、自分を受け入れてくれる、自分を出せるところ、仲間と楽しく学べる場所となっています。そんなシャインに修了生が「ただいま」と言って立ち寄ってくれるのは、自分のひとつの居場所となっているのだろーと思います。

学校卒業後の学びの場、自立訓練は青年期をより豊かに過ごすことで、受け身ではなく主体的に生きることにつながると思います。

「自分づくりは、集団の中に居場所があり、一人ひとりが安心できる中で主体的に自由を獲得していくことにほかならない」（小畑氏、生活教育より）

(事例報告 B②)

イケてる自分になってハジけたい！！

～ファッションショーの取り組み～

小西 寛之

(まなびキャンパスひろしま 生活支援員)

【趣旨】

「服は家族が決めて買ってくれる」「自分で選んだことがない」「朝、着る服が置いてある」まなびキャンパスのほとんどの学生が自分の服装に関心がありませんでした。何人かの学生は髪の毛がボサボサで寝癖のついたまま登所していました。

2年生になると少しずつ興味関心に変化が生まれます。いつもオシャレな女の子が、今年のテーマ研究に「ファッション」を選択しました。ファッションのトレンドに詳しく、他の女の子たちが「私はあんなにオシャレになれない…」と羨むほどでした。まなびキャンパスの小さな空間では、休み時間などで芸能やドラマ、ポップソングのトレンドの話題が飛び交います。そのような自然な会話のやり取りが、若者のファッション、おしゃれについて興味を持ち、服装の基本、身だしなみなどを学ぶきっかけを作ってくれました。

本事例報告では、学生たちがファッションショーへの取り組みを通して変化してきた様子や取り組んできたカリキュラムについてお伝えできたらと思います。

【概要】

1. “まなびキャンパスひろしま”の歩み

まなびキャンパスひろしまは、知的障害の子どもを持つ母親たちが、特別支援学校高等部の卒業後すぐに就労するのではなく、健常者が大学に進学するように、我が子にももっと学ぶ場や、仲間と青春する場を作りたいという強い希望から創設されました。

「特定非営利活動法人まなびや」を主体とし、「ワークきらぼし（就労継続支援 B 型事業所）」、「相談ルームはるにれ（相談支援事業所）」、「まなびキャンパスひろしま」の3つの事業所で成り立っています。

利用期間は2年間で、利用者は1年生 12 名（手帳の判定 B:4 名、㊦:3 名、A:5 名）、2年生 9 名（手帳の判定 B:2 名、㊦:6 名、A:1 名）の合計 21 名の 18～20 歳の若者たちが通われています（2020 年 11 月現在）。

2. ファッションショーへ向けて

まなびキャンパスひろしまの授業は、学生たちの日々の様子などから授業の内容を検討し、学生たちの要望や実態に合わせて授業作りをしています。

「ファッションショー」は、大阪のシュレオーテが5周年を記念して刊行した『学青時代』に報告された取り組みをお手本にしました。「おしゃれ」という青年期にふさわしい取り組みを通して学生たちがコーディネートや服のサイズ、買い物などを学習する様子がまなびキャンパスの活動にピッタリだったからです。

授業「経済」では、実物のお金を使った金種の学習や買い物学習などを行なっています。「ファッションショー」の取り組みの企画会議では、経済の年間カリキュラムに組み込むことになりました。しかし、他の授業と連動する方が学生の意識が高まるという意見があり、「経済」「生活講座」「美術」「合同ホームルーム」の授業で4月から8月にかけて「ファッション（服装）」について取り組むことになりました。「ファッション（服装）」に関する学習を通して、自分の服装や身だしなみに関心を持ち、普段の生活を豊かにすることを「ねらい」にしました。そして、仲間関係を通して、自己理解、他者理解に触れ、集団の中で自信を高めることも大切にしました。

3. 各教科の学習

「経済」は全学年を4つのグループに分けて学習しています。Aグループでは、「大きい」「同じ」「小さい」の学習をしました。始めは、野菜、紙などの具体物を用い「大きい」「小さい」を確認しました。次に、実際に子どもや大人のTシャツを使って、自分に合う物を見つけました。幼児のTシャツを自分の体に合わせてみて、「ちいさーい！」と言って盛り上がりました。

B、Cグループでは、いつも家族としか買い物をしたことがない人が多いので、実際にお店に行って買い物をする体験をしました。まなびキャンパスの消耗品を買いに行ってもらい、仲間同士で相談しながら商品を選んでいました。

Dグループはまず自分の体のサイズを測るところからスタートしました。長さの学習をした後、2～3人ずつに分かれて、胸囲、胴囲、身長などを測定し合いました。測定結果を基に自分の着ているTシャツやサイズ表を見ながら、自分に合っているサイズを確認しました。Dグループではみんなで実際に買い物に行くお店の下見を行いました。お店でチラシをもらう人、道案内する人、カメラを撮る人に分かれ、ユニクロ、H&M、GUなど7店舗を見て回りました。

後日、Dグループが学生全体に下見の報告をしました。自分たちで撮影した写真を見せながら、下見に行った一人一人のおすすめのお店を紹介し、下見で歩いたコースを説明しました。

「生活講座」は、身だしなみや、掃除の仕方、裁縫などの学習に取り組んでいます。1年生の授業では、雑誌を切り抜いてマイファッションページを作成しました。雑誌や広告から、自分の好きな洋服やコーディネートを選び、それらを切り抜いて作りました。2年生の授業では、着ている服のアンケートを取りました。気に入っている色、誰が服を選んでいるかななどを答え、アンケートの回数を重ねるごとに自分で選ぶ人が増えていきました。その他にも、「季節に合った服」「仕事やスポーツで着る服（ユニフォーム）」について学習しました。

「美術」では、モデル（紙人形）にマーブリングした紙や色紙を貼って、自分の好きな服装を作りました。完成したら好きな曲を1つ選び、自分の作ったモデルを使ってミニファッションショーをしました。

「合同ホームルーム」では、まずパリコレや東京ガールズコレクションの動画などで、観客に囲まれランウェイを堂々と歩くモデルさんたちを鑑賞しました。その後、学年縦割りの4つの班に分かれて、歩く順番や歩く時に流す曲を決め、ウォーキングの練習をしました。どんな曲にするのか、どんなポーズを決めるかを学生同士でわいわい楽しそうに話し合い、ファッションショーに向けてイメージを広げました。

4. Tシャツ購入！

下見の報告会の成果もあって、それぞれ目的の店でお気に入りの1枚が買えたようでした。同じ柄でも黒と青のどちらの色にするか悩んだり、服を体に合わせ鏡で確認したりと思いつきの服を選んでいました。即決する人もいれば、選びきれなくて仲間に相談する人もいました。早く買い終わった人は、迷っている人と売り場と一緒に回ってアドバイスしたり、セルフレジでの支払い方を教えたり助け合う場面が見られました。

5. ファッションショー

2年生はショーに向けての準備や当日の役割を担いました。横断幕やアンケート用紙、しおりの挿絵など、2年生が分担して作りました。司会者を決める話し合いでは、「MC（司会）は面白い人がやった方がいい！」という意見が出て、「それなら1年生のあの人がいい！」「それ、絶対盛り上がる！」とみんなの意見が一致したので、2年生みんなで1年生のKさんにMCの依頼をしました。2年生の熱い推薦を受けたKさんは「それならSさんとMCをやりたい！」と希望しました。MCはKさんとSさんに決まりました。2人は読み練習をする毎に次々とアドリブを入れて、とても楽しそうでした。

ファッションショー当日、学生たちは自分の役割を自覚して動き、スタッフは音響のトラブル以外ほとんど手伝いませんでした。受付係は、しおりやアンケートを来場者に渡しました。音響係は出演者の出入りに合わせて一人ひとりが希望した曲を流しました。また、自分の出番を考慮しながら3人で交代し、途切れなく曲を流しました。会場係は開演前の準備だけでなく、オープニングダンスが終わった後にレッドカーペットを広げることや、ショーの途中でレッドカーペットがずれたら補強に行くなど対応していました。

MCの二人は、一人一人がランウェイを歩く時に、その人のお気に入りポイントをアナウンスしました。ショーの最中にアクシデントが起こると、即座にミニコントをして時間を稼ぐほどノリに乗って場を盛り上げました。

ランウェイを歩く学生の姿は、いきいきとしてとても魅力的でした。自分で選んだ好きな音楽が流れ、MCが自分の選んだ服を紹介してくれることで、ランウェイを歩く学生の姿は誇らしく堂々としていました。

恥ずかしがり屋の学生が今まで見せたこともないポーズをとったり、真面目な男の子がB-BOY風（ヒップホップギャング？）のような動きをしてみせたり、家からサングラスやカチューシャを持参した学生がいたりそれぞれ思入れを持って臨んでいました。1年生が恥ずかしくて歩けない時に「行ってあげてー」と2年生同士でやり取りしながら手を差し伸べ一緒にランウェイを歩きました。他の1年生がレッドカーペットの途中で止まった時は「まだ行かんでもいい」と1年生が一人で歩けるのをじっと2年生が見守り、「そろそろかな…」と頃合いをみて手助けするといった素晴らしい光景も見られました。準備期間が短く大変でしたが、学生たちの「オシャレをしたい！」という思いに後押しされて、当日はみんなの笑顔弾ける楽しいショーになりました。

6. 保護者のアンケート

「とても楽しみにしていました（子どもも家で楽しそうでした）。すてきでした。普段と違い、学生さん達がとても楽しそうでキラキラキイキイしていました。みんなで作り上げたんだな一つで伝わってきてみている側もとっても楽しかったです。」

「学生さん主体の進行、ダンスユニットの皆さんのカッコいいダンス、MCの2人の素晴らしい語り、チームワークと盛り上がりで驚かされました。とっても楽しかったです！準備や練習、本番までの取り組みは大変だったことと思います。ランウェイを歩く、お一人お一人が輝き、表現している姿は感動でいっぱいでした。」

「まなびキャンパスのメンバーが生き生きと参加されていたのがとても良かったです。自分の選曲でのお披露目がある人らしさを表現していて良かったです。」

「変な服を選んでいたら親が変えていましたが、それではいけないということを教えてもらいました。自分で選ぶようになり、おかしくてもそのまま行かせるようになりました。私の方が『まあ、いいか』と思えるようになりました。」

「ファッションショーへのわかりやすい見通しの中で、仲間たちの姿を見ながら我が子もひそかにイメージを膨らませていたのではないかなと思わせる姿でした。着替えを拒んだり、ランウェイ

イでのリハに参加しなかったり、たくさんご心配をお掛けしたことと思います。スタッフを心の支えに、ランウェイを堂々と良い表情で歩く姿はとても嬉しかったです。」

7. 成果と今後の課題

授業を重ねるごとに学生たちのファッションショーへの期待が高まり、障害の程度にかかわらずとても楽しめていました。複数の科目から、「ファッション」「身だしなみ」「サイズ選び」などの課題をどのように分担するかをスタッフ間で議論し、ファッションショーに向けて総合的な取り組みとなりました。学生たちにとって学習につながりのあることが、学習の意欲を高めていると実感できました。スタッフにとっては新しい試みでしたので、どのような授業作りをするのか楽しみであったと同時に不安もありました。提案当初よりも取り組みが大きくなったので、授業作りに苦労しました。

Tシャツの買い物では、あまり悩まずに選ぶ人も多く、次回はフィッティングルームで合わせてみたりと、じっくり選ぶことへの工夫など買い物する時の配慮もできたらと思いました。

【結論】

テレビドラマではきれいな女優さんが素敵な服を着て役を演じたり、音楽番組ではアイドルグループが着飾ったりしていて、若者たちにとって「ファッション」を目にする機会はたくさんあります。「ファッション」に憧れがあっても自分には遠い存在、一度も考えたことがない、というところから、「自分を見せたい」「見られたい」という若者の欲求に結びつけていく過程を、授業や授業外でも大切にしてきました。

またオシャレの基礎として、清潔、身だしなみを学習する良い機会になったことも確かです。2年生のおしゃれな女の子を中心に、2年生が1年生に向けて身だしなみ講座を2回開催しました。

友達との関係性の中で自分のことを考える場があることで、自ら考え行動する「生活の主体者」に向かうことができます。ただ「しつけ」として身だしなみについて学ぶのではなく、「おしゃれをしたい」という思いや仲間から刺激を受けながら自分が学びたいと思えることが大切だと感じた取り組みでした。

(事例報告 C①)

名古屋市教育委員会・委託青年学級～瑞穂青年学級 38 年の歩み～

河合 賢治

(ボランティアサークル汽車ポッポ)

【趣旨】

ボランティアサークル「汽車ポッポ」は1981年、名古屋市瑞穂青年の家で開設された「障がい者ボランティア講座」受講生の有志がボランティア活動を目的として結成した団体である。

名古屋市・瑞穂青年学級は1982年、知的障がい者の子を持つ汽車ポッポの会員から養護学校等卒業後の青年のため社会学習及び余暇活動を支援する活動の要望を受け、汽車ポッポが開設した障がい者青年学級である。開設の際、名古屋市教育委員会から障がい者青年学級の委託を受けた。

今回、瑞穂青年学級の38年間の実践活動を振り返り、障がい者の生涯学習活動の場として瑞穂青年学級の現状及び課題について報告する。

【概要】

1. 名古屋市・瑞穂青年学級開設の経緯

ボランティアサークル「汽車ポッポ」会員の中に知的障がい者の子を持つ会員がおられ、その知的障がい者の方が養護学校卒業後、休日は一日中テレビばかり見ているような生活をしており、余暇活動及び社会経験と積むことで学習する場を提供できないか相談を受けた。そんな青年たちを外へ連れ出して、社会体験することにより学習もでき、楽しい余暇も過ごせる青年学級活動が運動として展開され始めていた。名古屋市もこの運動を行う団体から要望を受け、必要性を認め、本来は行政がすべき教育委員会の業務を民間団体に委託するシステムを始めていたところであった。これが委託青年学級である。「汽車ポッポ」もこの運動に共感し、1982年に瑞穂青年の家で瑞穂青年学級を毎月1回日曜日に開設し、その後、瑞穂青年の家閉館に伴い、瑞穂生涯学習センターに拠点を移し現在に至る。現在は名古屋市子ども青少年局補助金交付を受けている。

2. 活動内容

年度ごとに会員を募集し、毎月、拠点での行事を開催しているが、今年度はコロナ禍の中、対面の行事を自粛して自宅での青年学級を開催していた。12月から対面行事を再開予定である。

行事の企画、準備、反省及びお便り出し（行事案内、行事報告の送付）を実施するため、毎週、瑞穂生涯学習センターを利用して例会を実施している。自粛期間はZoomでオンライン開催。

行事以外にボランティアの学習会、懇親会等を実施してボランティアの懇親を深めている。また例会には障がい者の有志も参加し、参加意識を高めると共に彼らの居場所にもなっている。

＜2020年度 瑞穂青年学級 行事＞

月	内容	場所
4月	科学館見学⇒自粛	—
5月	工作と料理づくり⇒自粛	—
6月	カラオケと室内レクリエーション⇒（自宅：塗り絵）	自宅「おうちで青年学級」
7月	旅行説明会とボウリング⇒（自宅：折り紙）	自宅「おうちで青年学級」
8月	バス旅行（未定）⇒（自宅：夏の思い出作り）	自宅「おうちで青年学級」
9月	青年学級合同運動会⇒フェイスシールド準備	—
10月	リニア鉄道館見学⇒（自宅：フェイスシールド）	自宅「おうちで青年学級」
11月	ポッチャ大会とお菓子作り⇒対面青年学級準備	—
12月	クリスマス会⇒対面行事再開	瑞穂生涯学習センター
1月	もちつきと新年会	瑞穂生涯学習センター
2月	福祉の日（青年学級合同文化祭）	北生涯学習センター
3月	いちご狩り	大府ブドウ園

3. 参加者の背景

瑞穂青年学級の活動に参加する障がい者の方は、瑞穂区在住で（現在は他区からも参加）、普段は就労、または福祉事業所に通っている。年齢は10代から30代（現在は30代から50代）で毎回20から30名程度が参加している。

4. ボランティアの背景

汽車ポッポのボランティアは当初の講座受講生から、その後、ロコミ、社会福祉協議会及び拠点でのボランティア募集案内等で集まり、学生、社会人、主婦である。年齢は10代から40代（現在は20代から60代）で約20名（現在は10名程度）である。

5. 活動で大切にしていること

行事は毎年、学級生から直接要望を聞いて年間計画を立てている。また、毎年、必ず、これまで実施してことのない新しいプログラムを入れることにしている。新しいことを実施するためには、既存行事よりも何倍も準備に時間と労力がかかるが、それを行うことで、ボランティアの力量を上げることもでき、学級生にとっても新たな体験をすることができ、青年学級の本来の趣旨にそっているからである。

企画、準備、実施、反省と順をおって必ず行なう。初めて行く場所は必ず下見を行い、現地で対応して下さる方と会って行事内容を理解してもらえらるまで説明する。相手の方の障がい者に対する不安を払拭し、私たちも初めての場所でも自信を持って活動できるのである。

初めて実施する行事はリハーサル等を必ず行い、余裕をもった運営を行うことができ、失敗しない安心して楽しい安全な行事を実施している。

行事の当日に必ず反省会を行う。次回の例会でそれを元に問題点があれば改善方法を検討する。次回以降、検討結果は「汽車ポッポ」の新たなルールとなっていく。たとえボランティアでも同じ失敗を繰り返さないようにPDCサイクルを実施している。

6. 活動の成果

毎週の準備や学習のための定例会(通称:例会)にも学級生の一部が自主的に参加している。ボランティアと一緒に反省会で意見を言ってもらい、毎月発行している行事報告と案内の印刷、紙折り、封筒入れや、行事用に準備物の製作作業を行っている。学級生も例会に毎週、楽しそうに参加している。自分も行事を運営しているメンバーの一人として自覚を持つようになってきている。学級生にとっても居心地のよい居場所になっている。このように、参加可能な学級生はボランティアと同じ活動に参加してもらうことで、相互に信頼し助け合いながら活動ができるよう社会人としても成長することができた。

毎月、その月の行事について学級生の名前を入れた報告者と翌月の行事案内を作成し「お便り」として封筒に入れ送付している。この作業はボランティアにとって大きな負担となっており、一度は行事案内のみをはがきで送付する案も出された。しかし、学級生にとってはこの「お便り」が毎月郵送されてくるのがとても楽しみであることがわかり、現在も毎月継続して発行している。このように、月にたった1回の行事であるが、学級生にとって青年学級が生活の一部として定着し、生活していく上での糧となり楽しみになっている。それをボランティアがしっかりと受けとめ、障がい者の生涯学習活動として定着し、開始以来38年間継続して活動している原動力となっている。

本活動が福祉貢献に顕著であったことからH21年、厚生労働大臣表彰を受けている。

7. 課題

10年程前まで名古屋市内には名古屋市教育委員会が管轄していた「青年の家」という、青年が主体として学習、活動する公民館施設が5館存在していたが、十数年前、その役割は終え存在意義はなくなったとして、廃止に追い込まれた。汽車ポッポも「瑞穂青年の家」を拠点に瑞穂青年学級を開設していたので、拠点を失うところであったが、かろうじて瑞穂生涯学習センターに拠点を移し、存続することができた。

「青年の家」は、当初は有料施設だったが、青年活動の重要性を認めてもらうための運動を展開し、従来有料であった利用料を実質的に全額減免までもっていった実績がある。また、青年にとって有益な講座の提案やサークルに対する支援も万全で、職員と利用者の関係も堅い信頼で結ばれていた。障がい者青年学級の合同文化祭である、「福祉の日」も瑞穂青年の家の理解により始まったが、閉館に伴い北生涯学習センターに移管ができたのも、旧職員の方の理解によるものであると考える。このような有益な施設の廃止の対し何度となく利用者から廃止取りやめの要望を名古屋市に対して出してきたが、受けいれられなかった。閉館とともに活動をやめた青年団体もたくさんあり、「青年の家」役割は終えていなかったのである。

また、名古屋市各区には社会教育の拠点として社会教育センターという施設があったが、生涯

生涯学習センターに変えてしまった。名称は変わっても教育委員会の所轄であったが、それが区役所管轄の施設となってしまった。そして、数年前からは民間委託になり、本来、社会教育の拠点であった公共施設まで社会教育の場から放棄され、障がい者の生涯学習も取り残されてしまっている。

私たちは瑞穂生涯学習センターを利用しているが、委託当初は不慣れのせいかな手際もあつたが、対応も企画する講座の内容も充実してきた。利用者や利用団体に対して自主講座の提案もあり、汽車ポップも何年か振りにボランティア体験講座を企画することができるようになった。利用者の要望に応え、頑張って活動する団体に寄り添ってくれることも事実である。

このような社会教育とりわけ、障がい者の生涯学習の場にとって厳しい環境の中、青年学級にとって見据えていかなければならない課題がある。

(1) コロナ禍での行事対応

コロナ禍で行事を自粛しており、対面行事ができない。学級生と会えない。

(2) 学級生の退会

会員家族の高齢化で会員の行事の送り出しが困難となり退会する学級生が出ている。

(3) 青年学級活動の周知不足

青年学級活動が周知されてないため、新会員及びボランティア減少に影響している。

(4) 青年学級開設要件の負担

名古屋市の補助金要件の内、34歳以下の障がい者8名以上が負担になっている。

(平成30年度までは34歳以下の障がい者10名以上が緩和された。)

発足当初の青年学級という名称にこだわり、本来、障がい者の生涯学習という観点から鑑みれば、年齢制限を撤廃すべきところ、担当部署が教育委員会から移管された際に現在の子ども青少年局が担当となったため、年齢制限が維持されている。

8. 課題の解決に向けて

(1) 「おうちで青年学級」と称し自宅で可能な活動を企画

コロナ感染対策のガイドラインを検討して安心・安全な対面行事再開を目指す。

(2) 「障がい者ボランティア体験講座」の開設

瑞穂生涯学習センターの自主学習グループ開設講座への開設(今年度はコロナ禍の為中止)

(3) 障害者青年学級の周知

青年学級が紹介のために作成したパンフレットを、名古屋市子ども青少年局が編集・印刷して特別支援学校/特別支援学級の卒業生に対して配布した。これを見た生徒が入会した。

【結論】

以上のことから、障がい者青年学級は障がい者にとって支援学校卒業後の生涯学習活動として定着し、生活していく上での糧となり楽しみになっており、障がい者の数少ない生涯学習の場として多くの課題を抱えつつも、解決を図りながら今後も継続していく必要があると考える。

(事例報告C②)

町田市障がい者青年学級と本人活動の会とびたつ会

松田 泰幸

(とびたつ会支援者)

【趣旨】

東京都町田市では、1974年11月に保護者の要望により、障がい者青年学級がスタートしました。1980年代には、オリジナルソングをつくりはじめ、1988年には、若葉とそよ風のハーモニーコンサートを開催し、活動の様子をステージから社会にアピールするようになりました。2004年には本人活動の高まりの中で「とびたつ会」という本人活動の会を立ち上げて活動を展開しています。青年学級と共に様々な活動に取り組みながら、歌づくりと発表をとおして、自らを表現することの大切さ、社会教育の大切さ確認したいと思います。

【概要】

1. 青年学級の概要

町田市障がい者青年学級は、町田市教育委員会生涯学習センター（まちだ中央公民館）の主催事業として実施されています。現在、166人の何らの障害をもつといわれる青年・成人が、70人余りの有償ボランティアスタッフ（以下、「担当者」と、3つの学級に分かれて、5月末から3月初旬の月2回、年間16回程活動しています。

公民館学級 第1第3日曜日 まちだ中央公民館 〇〇人 市民ボランティア〇〇人

ひかり学級 第1第3日曜日 ひかり療育園 〇〇人 市民ボランティア〇〇人

土曜学級 第2第4土曜日 まちだ中央公民館 〇〇人 市民ボランティア〇〇人

※活動時間は、いずれも10時～16時

青年学級の始まりは、親からの要望によるものでした。都内ではすでに1963年に「すみだ青年教室」がスタートしていました。町田でも「学校をでても行くところがない子どもたち」「就職しても差別され、バカにされだまされる子どもたち」が「なんとか非行にはしらないために、月一回でもいいから青年たちのつどいを開いてもらいたい」（1979年実践報告集4）という要望が、当時の福祉事務所にしだされ、それを聞いた職員が、当時、働く青年の青年学級を実施していた社会教育課に働きかけて、社会教育課の主催事業として、福祉事務所が協力する形で1974年11月に活動がはじまりました。この仕事を担当した大石洋子氏は青年学級を始めるにあたり、大学に通い障害について学んだり、家庭訪問をして障害をもつ人々の状況を把握しようとしたそうです。そうして始まった当初は活動は20人でのスタートでした。

2014年12月には、町田市役所エントランスを会場に、40周年記念集会を盛大に開催しました。
目標と活動の流れ

青年学級の目標は、「生きる力・働く力の獲得」です。「仲間づくり（自治活動）」「生活づくり」「文化創造」を活動の柱として実践しています。一日の流れは、次のとおりです。

○10時00分～朝のつどい（全体会）全員でつどい、歌をうたって、一日の予定など共有します。

○10時30分～コース活動＝各学級とも5、6のグループに分かれて活動しています。1つのグループは、10人から15人ぐらいです。1985年にコース活動がスタートしてしばらくは、「音楽コース」「劇ミュージカルコース」「健康からだづくりコース」「自然コース」「ものづくりコース」「生活コース」を基本にグループが作られていました。2018年度の公民館学級では、文部科学省の「学校卒業後における障がい者の学びの支援に関する実践研究事業」を受託し、障害をもつ人の思いを社会にアピールする活動に取り組んだことから、「コンサートづくりコース」が生まれました。自治活動を重視していることから、コースの選択、活動の内容についてもすべて、参加者の要望を尊重し決めていきます。活動の内容については、グループのテーマに応じて、参加者全員で年度はじめに議論をして、決めていきます。

昼食（みんなで同じ弁当を食べます）をはさんで、15時30分までコース活動に取り組みます。

○15時30分～帰りのつどい＝1日の活動を終えて、全員で集まり、活動の様子を報告しあったり、今後の活動を確認したりします。もちろんここでも歌をうたって活動を締めくくります。

○16時00分～班長会＝コースの代表が集まって、合宿や日帰り旅行、クリスマス会などの全体会、成果発表会など全員で取り組み活動について話し合います。

2019年度の活動は、新型コロナ感染の拡大に伴って、3月から休止となり年度末の成果発表会ができたのは2月末に実施できた土曜学級だけでした。緊急事態宣言解除後の6月後半には公民館は使えるようになりましたが、青年学級は7月によりやく再開しましたが、学級ごとに取り組みは違って、元通りの活動ができていない学級と、まだ午前・午後で参加者を分けている学級もあります。

2. とびたつ会の概要

とびたつ会は、2004年にはじまった本人活動の会です。当時青年学級は180人を超える人数と担当者の不足で青年学級を希望する若い人が入れない状況でした。また、各地では本人活動の活動が活発になってきていました。そこで、本人活動の会を町田でもつくって、青年学級を卒業することで新しい若い人たちに青年学級を経験してもらおうと考えました。最初は8人でスタートしました。

（1）参加者

2019年度の活動メンバーは25人でした。女性8人、男性17人。青年学級を経験した人16人、とびたつ会の直接入った人9人。車イスを利用する人が8人。ヘルパーさんと一緒に参加する人が5人ででした。

（2）活動日と活動場所。

毎月第2、第4日曜日 午前10時～16時。会場は主にコメット会館5階ホールを有料で借用しました。また、公民館など公共施設も活動内容によって利用しました。1月からはコメット会館が防音工事のため、使えなくなり、公民館と市民フォーラムを使うことになりました。また、2月下旬からは新型コロナウイルス感染拡大により、参加者も減り、細々とした活動になりました。

(3) 2019年度の主な活動（資料参照）

(4) うたづくり

第19回若葉とそよ風のハーモニーを終えて、メンバーの稲村宏美さんが感想を書きました。

「同じ時間(とき)を過ごせる事の幸せ。同じ時間(とき)を共有出来る仲間がいる事の幸せをとびたつ会や青年学級の人と話をする時、1つの物を一緒に作り上げる時、皆で笑い合う時、1つの事を成し遂げた時、いろんな所で感じます。可能な限り時間を共有して充実した気持ちを感じる事をやっていくうちに深まった絆があれば、いつかライフスタイルの変化で、離れていく日が来たとしても、心は繋がっていられる。そう思います。今、私の周りには熱意を持って様々な事に取り組める仲間がいて、熱く、そして時には思いが溢れて涙が出てしまう事もあるけれど、仲間の暖かい言葉と優しい手のひらにいつも支えられて最後は笑顔でまた明日から頑張ろうと思って帰路につける。その時間がいとおしく大切な物になりました。どうか時に切なくなるくらい、いとおしい、この時間空間がいつまでも続きますように。語り合える仲間がいる事。語り合える場所がある事。その事を最近、少し切なくなるくらい、いとおしく大切に感じています。」

この作文をもとに、うた「ラリルレロンでハッピー」をつくりました。

(5) 課題と今後の展望～新型コロナをめぐって～

今回の新型コロナウイルスの感染症拡大では、世界中で感染防止のために「ロックダウン」と呼ばれる強制的な外出規制、行動制限が実施されました。日本では緊急事態宣言により、外出自粛の要請が発せられ、それを受けて町田市は公共施設を使用中止にしました。それにより、とびたつ会は活動ができなくなりました。6月下旬から公共施設が使えるようになり、これにより活動するかどうかは、私たち使う側にゆだねられました。ここでの判断基準は、とびたつ会の活動が「不要不急な活動」であるかどうかということです。この点のとびたつ会のメンバー一人ひとりが判断することです。家族や関係者との話し合いも必要かもしれません。とびたつ会では、再開してこの点について話し合い、「とびたつ会の活動が必要だ」というメンバーがいたことから、会場は確保することにして、参加するかどうかは、メンバー個人に任せることにしました。その結果、6月から9月の活動では25人中10人前後のメンバーが参加し、そのほかのメンバーの多くは感染予防のために不参加となりました。「3密を避ける」と言われても、とびたつ会の活動自体が3密前提の活動です。感染しないようにしながら、どのようにすれば活動ができるのでしょうか。

ア 健康を保つ イ 体調が悪いときは参加しない ウ 手洗いをする エ 換気をする

感染防止と活動を両立させる方策が課題です。

【結論】社会教育の充実を

障がいをもつといわれる人々も含め、また、青年期も含めあらゆる世代に人にとって、生活の場と仕事の場とは違う第3の場、学びの場があり、そこで自らの暮らしを見つめなおし、発信することをとおしてより豊かな暮らしにつながるのだと思います。本来の社会教育が目指してきたものが、形骸化されてきていますが、コロナ禍の今こそ、語り合い、知恵を出し合う場としての社会教育の場の充実が不可欠だと考えます。

資料

とびたつ会活動経過(2019年4月～2020年3月)				
	月日	内容	参加人数	場所
1	4月14日	第19回若葉とそよ風のハーモニー練習2	120人	まちだ中央公民館
2	4月21日	第19回若葉とそよ風のハーモニー練習3	120人	まちだ中央公民館
3	4月28日	第19回若葉とそよ風のハーモニー練習4	120人	まちだ中央公民館
4	5月5日	第19回若葉とそよ風のハーモニー練習5	120人	まちだ中央公民館
5	5月11日	第19回若葉とそよ風のハーモニー本番	230人	町田市民ホール
6	5月26日	交流ハイキングorとっておき音楽祭。	25人	コメット会館
7	6月9日	若そよビデオ。2019年度の活動検討	17人	コメット会館
8	6月23日	愛のほほえみコンサートについて検討。調理検討	24人	コメット会館
9	7月14日	参院選について意見交換。短編映画「東電刑事裁判」	21人	コメット会館
10	8月4日	調理＝手づくり中華麺でつくる焼きそばと冷やし中華	22人	まちだ中央公民館
11	8月18日	愛のほほえみコンサートに向けて台本づくりと練習	17人	コメット会館
12	9月8日	愛のほほえみコンサート本番	25人	ポプリホール
13	9月22日	愛のほほえみコンサートのビデオを見る。聖心祭準備	21人	コメット会館
14	10月6日	聖心祭に向けて練習。聖心女子大学の学生さんと交流	22人	コメット会館
15	10月20日	聖心女子大学学園祭「聖心祭」出演	25人	聖心女子大学
16	11月10日	聖心祭のビデオを見る。今後のイベントに向けて検討	20人	コメット会館
17	11月24日	12/22「青年学級の新しい流れ」準備。サンシ・モンさんと交流	24人	コメット会館
18	12月8日	「青年学級の新しい流れ」での発表に向けて練習	18人	コメット会館
19	12月22日	「青年学級の新しい流れ」発表。望年会	22人	公民館、コメット会館
20	1月12日	とびたつ会15周年イベント&ドヤフェス「ギターパンダがやってる」	150人	公民館、コメット会館
21	1月26日	15周年イベント振り返り。	23人	市民フォーラム
22	2月9日	調理実習「豚まんづくり」	19人	公民館
23	2月15日	ロータリークラブ ふれあいコンサート	17人	ポプリホール
24	2月23日	第25回障害児・者性教育セミナー 生涯学習分科会	20人	立正大学 大崎C
25	3月8日	前回活動の振り返り。2019年度振り返りと2020年度に向けて①	12人	市民フォーラム
26	3月22日	2019年度の振り返り 2020年度に向けて②	12人	市民フォーラム
			合計	1266人

(令和2年度)

第2回生涯学習セミナーのテーマと内容

竹井 沙織

(中京大学非常勤講師、生涯学習セミナーコーディネーター)

(テーマ)

アート・自己表現・自分らしい生き方／社会参加

(内容)

文部科学省「スペシャルサポート大使」であるイラストレーターの横溝さやかさんをゲストにお迎えし、紙芝居公演を鑑賞したり、横溝さやかさんからお話を伺ったりして、参加者自身にとって、「絵を描く」ことや「作品をつくる」ということはどういうことなのか、創作活動を通じた社会参加のあり方について考える。

対象者：見晴台学園の生徒、見晴台学園大学校の学生、自立支援センターるっくの職員
定員：3密を避けるために、60名（当事者50名）とする。

(タイムスケジュール)

【前半】横溝さやかさんの生き方に触れる

13:00～13:05 挨拶

13:05～13:35 studio COOCAの活動VTR

横溝さやかさんの紙芝居公演

13:35～14:00 横溝さやかさんに対する質問コーナー

(studio COOCA副施設長の中尾さんやお母様も登壇予定)

14:00～14:10 休憩

【後半】自分自身の生き方を振り返る

14:10～14:30 グループワーク

横溝さんの生き方に触れ、感じたことをグループで感想交換する

14:30～14:50 全体共有

14:50～15:00 総括

<総括（案）>

田中良三（本コンファレンスコーディネーター）

1. 文部科学省の障害者生涯学習支援推進政策

文部科学省は、2016年12月14日、2017年度から、これまでの障害児の学校教育政策から、障害児・者の「生涯学習」政策へ転換を図ることを表明した。それは、2つの文書からなっている。

一つは、「障がい者支援の総合的な推進に関する大臣講話」（松野博一文部科学大臣）である。もう一つは、「文部科学省が所管する分野における障がい者施策の意識改革と抜本的な拡充～学校教育政策から『生涯学習』政策へ」（特別支援総合プロジェクト タスクフォース）である。後者の文書は次のように述べている。

「1. はじめに」

- ・これまで、文部科学省における障害者施策は、特別支援教育をはじめとする学校教育政策を中心に展開されており、学校を卒業した後については、障害者雇用や障害福祉サービスによる就労支援、生活支援といった労働・福祉政策に委ねられてきた。
- ・しかしながら、障害者が学校を卒業した後の豊かで充実したライフスタイルを思い描くときに、企業や障害者就労施設等といった「就労の場」とそれ以外の「日常生活の場」だけではなく、文化やスポーツに親しんだり、新しいことを学んだりする「生涯学習の場」を忘れてはならない。学びは、すべての人々にとって、学校を卒業した後も、あらゆるライフステージでの夢や希望を支える役割を担っているものであり、従来の学校教育政策を中心とする障害者政策から一歩進めて、障害者の生涯にわたる学習を通じた生き甲斐づくり、地域との繋がりづくりを推進し、「障害者の自己実現を目指す生涯学習政策を総合的に展開していかなければならない。

「2. 障害者の生涯学習施策推進の視点」

- ・人が豊かな人生を送っていこうとすれば、単に生活が保障され、仕事を通じて賃金を得、社会における役割を確認していくのみならず、学習、文化、スポーツといった生涯にわたる学習や体験の中から生き甲斐を見つけ、人と繋がっていくことが必要。
- ・障害者であっても生涯にわたって学び続けることができるよう取り組み、生き甲斐づくり、地域との繋がりづくりを障害者施策の目的の中に位置づけていく意識改革と抜本的な拡充が、文部科学省に求められている。
- ・文部科学省においては平成 29 年度以降、このような視点を踏まえた課題への対応が必要である。

「3. 文部科学省において取り組むべき課題について」

- (1) 障害者の学びを総合的に支援するための企画立案部門の創設
 - ・生涯学習政策局に「特別支援総合プロジェクト特命チーム」を設置し、省横断的な推進体制を確立するとともに、速やかに「障害者学習企画室」（仮称）を置くことを目指す。
 - ・特命チーム及び障害者学習企画室は、生涯学習政策局で実施する施策に留まらず、初等中等教育、高等教育、スポーツ、文化の全体的な施策にわたって、省内の各部局と調整しつつ、文部科学省が所管する分野における障害者施策の意識改革と抜本的な拡充の旗手としての役割を果たす。
- (2) 生涯を通じた学び、文化・スポーツ等において取り組むべき課題について（略）
 - (3) 教育分野において取り組むべき課題について（略）

文部科学省は、障害者の生涯学習についての上述の基本方針をもとに、2017 年度は「障害者学習支援推進室」を設置し、省内の関係予算を整理し、また、新たな政策方針の立案や学校卒業後における障害者の学びに関する有識者会議を立ち上げ、財源の確保など政策化に向けて基礎的整備を行った。そして、2018 年度から、新たな政策の具体化＝事業化に取り掛かった。「学校卒業

後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」(予算1億6百万円)である。(1)障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究、(2)生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究、(3)人材育成のための研修会・フォーラムの開催等、の三つの事業から成り立っている。その趣旨は、「学校卒業後の障害者が社会で自立して生きるために必要となる力を維持・開発・伸長し、共生社会の実現に向けた取組を推進することが急務。このため、学校卒業後の障害者について、学校から社会への移行期や人生の各ステージにおける効果的な学習に係る具体的な学習プログラムや実施体制等に関する実証的な研究開発を行い、成果を全国に普及することである。

これらの事業の中心である「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」では、効果的な学習に係る具体的な学習プログラムや実施体制、地域の生涯学習、教育、スポーツ、文化、福祉、労働等の関係機関・団体等との連携の在り方、特別支援教育や障害者福祉等の専門的知見を有するコーディネーター・指導者の配置やボランティアの活用方策に関する研究を実施することである。そして、この政策・事業は、2019・2020年度と継続され拡充が図られてきた。

この政策推進の基になっているのが、2019年3月の有識者会議『障害者の生涯学習の推進方策について一誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して一』と題する報告書である(以下、『報告書』)。ここでは、特に重視すべき視点として、(1)本人の主体的な学びの重視、(2)学校教育から卒業後における学びへの接続の円滑化、(3)福祉、労働、医療等の分野の取組と学びの連携の強化、(4)障害に関する社会全体の理解の向上、を挙げている。

これらは、障害者の生涯学習支援のあり方について、近年の実践的状況を踏まえたものであるが、画期的な政策といえる。

2. 障害者の「学校から社会への移行期」の実践

文部科学省の障害者生涯学習支援政策推進の基になっている文書は『報告書』である。この報告書の大きな特徴は、障害者の「学校から社会への移行期」に着目したことである。この視点は、全国専攻科(特別ニーズ教育)研究会が取り組んでいる、「福祉(事業)型専攻科」の実践に共通するものである。

ここでいう「福祉(事業)型専攻科」とは、後期中等教育の年限延長としての高等部本科三年間にプラス専攻科の設置を目標とする運動の中で、学校の代替措置として、障害者総合支援法における自立訓練事業や就労移行支援事業、生活介護事業を活用した青年期の学びの取り組みである。「報告書」では、「福祉(事業)型専攻科」の取り組みは、「障害福祉サービスと連携した学びの場づくり」として位置づけられている。

「福祉(事業)型専攻科」は、学校卒業後の継続教育としての生涯学習支援の場として光が当てられた。

この点に関して、私は第4回有識者会議(2018年5月23日)において補足説明を行う機会が与えられた(配布資料4-2)。「自立訓練事業等を活用した『学校から社会への移行期』における学びのプログラム及び支援について(メモ)」と題し、次のように述べた(以下、『補足説明』)。

【成果=問題提起】

- ① 学校から社会への移行支援に、「学び」を中心においている。学び活動は、1日午前一つ(90分)、午後一つ(90分)など、障害者一人一人の多様な個性や持ち味を引き出し生かすことができるように、大枠の時間設定をしている。
- ② 学校で身に付けた資質・能力を更に維持・開発するために、作業による技能の取得や就業体験・職場実習など職業に必要なスキルや、多様な生活体験・ボランティア活動などの社会体験によるライフスキルとともに、文化・教養・スポーツなど青年期にふさわしい多様な学習内容で構成している。

- ③ 子どもから大人への青年期教育として、障害青年たち自ら主体的・協働的に調べ・まとめ・発表し、自分たちで学習や交流を企画するなどのスキルを身につけさせる学習によって、人と関わる力(コミュニケーション能力や社会性)を身につけ、自ら判断・行動し自立できるように支援している。
- ④ 就業し自立した生活を送る基盤となる力を身につけるための多様な学び活動においては、ありのままの自分が出せ、安心して学びあうことができる仲間やスタッフのもとで、満更でもない自分を発見するなど自己肯定感や自信が持てるように取り組まれている。
- ⑤ 学校から社会への移行期の学び支援は、修了後の就労率も極めて高く、就労を継続し、また、就労後の相談活動などによって生活も安定するなど、十分な効果を発揮している。いっぽう、障害青年の学びのニーズが多様化し、「学校から社会への移行期」における学び期間は、当初の2年間から、3～4年間と長期化する傾向にある。

【課題=求められる方策】

- ① 自立訓練事業等を活用した「学校から社会への移行期」における学びを修了し、巣立っていった受講生に、その後の学びにどう繋いでいくのかということが問われている。各事業所が、修了生等対象に公開講座のような形で学びの場を提供していくことや、また、地域の公的社會教育機関等と連携し、障害者生涯学習支援地域ネットワークづくりの中核的な担い手となることが求められている。
そのためには、各事業所等が自ら修了後のプログラムの開発を行い実施体制のモデル等の普及に努力する必要がある。そのための専任スタッフが必要である。ここでは、実践家や専門家を地方公共団体や事業所等に派遣して、先進的な事例やノウハウを提供する支援体制を構築する必要がある。
- ② 自立訓練事業等が、「学校から社会への移行期」における学びの場としての一定の要件を満たすことができるように、全国をブロック毎に、地方公共団体担当者向けの研修や事業者等向けの各種研修を実施する必要がある。

この補足説明では、さらに、当時の全国の「福祉（事業）型専攻科」41カ所の一覧表と、「福祉（事業型）専攻科」といわれる自立訓練事業所等5カ所についての資料等を添付した。

3. 各発表の趣旨と意義

今回のコンファレンスは、一つには、東海・北陸ブロックで唯一文部科学省の委託を受けたNPO法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会の実践研究事業3年目のまとめとして実施した。

午前中の「成果報告」として発表された「生涯学習セミナー」は、『補足説明』において【課題】として指摘した点について、その後、本委託事業で新たに実践化を図った。

また「大学連携オープンカレッジ」の報告は、『補足説明』後、障害のあるなしを超えて共に学び育ち合う共生社会をテーマに、ブラックボックスとなっている青年期に視点をあて、本委託事業で新たな実践に挑戦した。

以下の図は、実践研究委託事業3年目の当初の企画案である。「生涯学習セミナー」と「大学連携オープンカレッジ」の各事業の位置を明らかにしている。しかし、その後のコロナ禍の対応のなかで、当初の計画は大幅に縮小・変更を余儀なくされた。



『補足説明』は、午後の事例検討会の「B. 学校から社会への移行期の実践〈卒業後から学校へ〉」に直接関わり、また、「A. 学校から社会への移行期の実践〈学校から卒業後へ〉」とも密接に関係している。

『補足説明』では、卒業後の「福祉(事業)型専攻科」しか取り上げることができなかったが、このコンファレンスでは、障害者の「学校から社会への移行期の学び」を学校からの移行期と卒業後の移行期の双方向から取り上げて検討した。

「C. ライフステージに応じた学びの実践」の事例検討では、全国各地に障害者の生涯学習支援に関する多種多様な取り組みがあるが、公的な社会教育機関が障害者の生涯学習支援に継続して取り組んできた市区町村は全国にほとんどない。そこでこのコンファレンスでは、地域で長年取り組まれてきた公的な生涯学習支援の事例を取り上げた。今後、全国のモデルケースとして参考にされることが期待できる。

これらの点に関わって、私ごとで恐縮だが、私は1980年代、名古屋市社会教育センター(現在、生涯学習センター)で障害青年対象の各種講座や、私が住む春日井市で障害者「共同青年学級」に取り組んだ。また、2000年代に、当時の勤務先の大学で生涯発達研究所事業として障害青年対象のオープンカレッジに、それぞれ約10年間にわたって取り組んだ。そして現在は、民間のフリースクール大学版というべき見晴台学園大学校で、知的・発達障害青年の生涯学習の一環として大学教育実践に取り組んでいる。

(田中良三・藤井克徳・藤本文朗編著『障がい者が学び続けるということー生涯学習を権利としてー』新日本出版社、2016年3月)

『補足説明』は、私がこれまで40数年にわたって各種の障害者の生涯学習支援に取り組んできた成果と課題でもある。

以上、障害者の学校から社会への移行期の学びを中心に、文部科学省の障害者学習支援推進政策・『報告書』・『補足説明』に、本コンファレンス主催者の委託実践研究事業3年目のまとめと全国の先進的な事例報告を関連づけて総括を試みた。

障害者の学びの場づくりコンファレンス in AICHI

オンライン
開催

【趣旨】 2014年（平成26年）の障害者権利条約の批准等を踏まえ、誰もが障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会の実現、地域における学校卒業後の障害者の生涯を通じた学びの場の拡充を目指し、東海・北陸地域における関係者が共に学ぶオンラインフォーラムです。昨年度に引き続き、「生涯の学びとしての、障害青年の『学校から社会への移行期』における継続的な学習の役割と課題」を中心に開催します。

【目標】 ①障害理解の促進、②実践者同士の学び合い、③学び・文化芸術等の機会の充実

【開催日】 2021年1月9日（土）10:00～16:30

【配信会場】 愛知みずほ短期大学

（名鉄「神宮前駅」から徒歩10分、駐車場無し。

愛知県名古屋市瑞穂区春鼓町2-13）

※上記会場への参加は、発表者などの関係者のみとさせていただきます。



記念公演 横溝さやかさん

「studioCOOCAの創作活動と自作紙芝居公演」

【横溝さんプロフィール】

文部科学省スペシャルサポート大使

1986年神奈川県生まれ。studioCOOCA所属作家。

競馬・牧場・世界名作劇場をこよなく愛するイラストレーター、アーティスト。代表作のオリジナル紙芝居「ピ・オンジュとオレ三世シリーズ」を中心に絵画制作、紙芝居公演、ライブペイントなど様々な創作活動を行っている。

【参加費】 無料

【定員】 Zoomでのオンライン参加 200名

・原則Zoomでのオンライン参加になります。

・必ず事前にお申し込みください。

・定員になり次第、締め切らせていただきます。

・参加申込者には事前に「プログラム集」を郵送します。

【参加申込受付】 11月27日（金）～12月25日（金）

【参加申込方法】 個人参加の方は、下記の「参加申込フォーム」からお申し込みください。

https://forms.office.com/Pages/ResponsePage.aspx?id=mVs5sIQiiEG942T1L0Arv2Zru_c_689lsfnjBllcabBUN1haVktGWkNSSDNXR0s5TTcxQUFHV05VMi4u

【主催】 NPO法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会／文部科学省

【協力】 全国障がい者生涯学習支援研究会
／全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会
／愛知特別支援教育研究会／愛知みずほ短期大学

【後援】 愛知県・愛知県教育委員会・愛知県社会福祉協議会
名古屋市・名古屋市教育委員会・名古屋市社会福祉協議会
瀬戸市・瀬戸市教育委員会
犬山市・犬山市教育委員会



【事務局・問い合わせ先】

NPO法人学習障害児・者の教育と
自立の保障をすすめる会
見晴台学園中学校

電話：052-355-6752

FAX：052-355-6753

メール：daigaku@miharashidai.com

2021年（令和3年）1月9日（土）プログラム 障害者の学びの場づくりコンファレンス in AICHI

- 9:30～ 開 場（Zoom 開室時間）
- 10:00～10:15 挨 拶 実行委員長：山本 理絵（愛知県立大学教授・教育福祉学部長、連携協議会委員長）
大塚 知津子（愛知みずほ短期大学・愛知みずほ大学学長・学校法人瀬木学園理事長）
- 10:15～10:30 趣旨説明「障害者の生涯を通じた多様な学習活動の充実について」小林 美保（文部科学省・障害者学習支援推進室長）
- 10:30～11:00 記念公演「studioCOOCA の創作活動と自作紙芝居公演」
横溝 さやか（イラストレーター・文部科学省スペシャルサポート大使）
- 11:00～12:00 文部科学省委託事業成果報告
① 生涯学習セミナー ----- 辻 浩（名古屋大学教授、連携協議会委員）
② 大学連携オープンカレッジ ----- 杉山 章（東海学院大学准教授、連携協議会委員）
- 12:00～13:00 <昼食・休憩>
- 13:00～16:00 事例検討会（事例報告各 20 分、質疑応答 A・B・C 毎に各 20 分）
コーディネータ：小畑 耕作（大和大学教授、連携協議会委員）
井口 啓太郎（文部科学省）
- A. 学校から社会への移行期の実践 <学校から卒業後へ>
事例報告① 特別支援学校聖母の家学園（辻 正）
事例報告② やしま学園高等専修学校（野上 佳代子）
- B. 学校から社会への移行期の実践 <卒業後から学校へ>
事例報告① 社会福祉法人きのかわ福祉会シャイン（小林 正尚）
事例報告② NPO 法人まなびキャンパスひろしま（小西 寛之）
- C. ライフステージに応じた学びの実践
事例報告① 名古屋市教育委員会・委託青年学級（河合 賢治）
事例報告② 町田市生涯学習センター・障害青年学級（松田 泰幸）
- ☆生涯学習セミナー（13:00～15:00）：当事者や学生たちの学び合いのセミナーを対面形式で実施（定員制のため、一般の参加受付不可）
コーディネーター：竹井 沙織（中京大学非常勤講師）
- 16:00～16:30 総 括 田中 良三（愛知みずほ短期大学特任教授・愛知県立大学名誉教授、本事業コーディネーター）

共生社会をめざす生涯学習 in 犬山 !!

— 「障害者の学びの場づくりコンファレンス in AICHI」 連動企画 —

横溝 さやか (イラストレーター、文部科学省スペシャルサポート大使)

紙芝居公演と作品展 【参加費】 無料

※犬山市の関係者による作品展も同時開催

文部科学省は、現在、学校卒業後の障害者の生涯にわたる文化・スポーツ・教養など学びの保障に向けた政策を推進しています。このたび、知的障害のある画家として、また、文部科学省スペシャルサポート大使として活躍中の横溝さやかさんをお招きして、自作の紙芝居公演と作品展を開催します。犬山市はかつて知的障害者の画家として、全国に知られた山本良比古さんが住まれた地です。関係の皆さんはじめ、地域の皆さんの多数のご参加をお待ちしています。

(横溝さやかさんのプロフィール)

1986 年生まれ。競馬・牧場・世界名作劇場をこよなく愛するイラストレーター。オリジナルな世界に登場する沢山のキャラクター達が繰り広げるちょっとブラックなファンタジーが好評。それまではざっくりしたタッチだったが 2007 年の逗子市主催、手作り絵本コンクール一般の部で最優秀賞を受賞したところから、どんどん作風が細かく丁寧になる。ピ・ヨンジュとオレ三世シリーズで紙芝居公演を行っている。



公演日時: 2021 年1月 10 日(日) 11:00~12:00 頃まで

展示会日時: 1月 10 日(日) 13:00~ 15 日(金) 10:00~15:00

※1月 11 日(月)は休館日のため観覧できません。

会場: 犬山市民交流センターフロイデ・301会議室 名鉄犬山駅から徒歩5分

(犬山市松本町四丁目 21 番地)

主催: NPO 法人学習障害児者の教育と自立の保障をすすめる会 / 文部科学省

協催: 犬山市障害者自立支援協議会

後援: 犬山市、犬山市教育委員会

<問い合わせ先> 見晴台学園大学校 (事業実施団体)

電話: 052-335-6752.

Mail: daigaku@miharashidai.com

(後援) 愛知県 愛知県教育委員会 愛知県社会福祉協議会
 名古屋市 名古屋市教育委員会 名古屋市社会福祉協議会
 瀬戸市 瀬戸市教育委員会
 犬山市 犬山市教育委員会

(協力) 愛知みずほ短期大学 全国障がい者生涯学習支援研究会
 全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会 愛知特別支援教育研究会

氏名	所属・役職等	備考欄
池田有希	瀬戸市教育委員会学校教育課指導主事	特別支援教育担当指導主事
牛丸基樹	あいちLD親の会かつむり代表	
小川純子	星城大学教授	元愛知県立特別支援学校校長
奥谷雪江	犬山市障害福祉課課長補佐	
川上雅也	(株)ジョブウエル代表取締役	尾張東部地域相談センターアドバイザー（愛知県委託）
小畑耕作	大和大学教授	全国障がい者生涯学習支援研究会副会長 全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会副会長
杉山章	東海学院大学准教授	人間関係学部
田中良三	愛知県立大学名誉教授	見晴台学園大学校学長、本企画コーディネーター
谷口充	NPO 法人やしま研究科理事長	やしま学園高等専修学校校長
辻 正	特別支援学校聖母の家学園副校長	同学園元校長
辻 浩	名古屋大学教授	
野々部智美	社会福祉法人名古屋市社会福祉協議会地域福祉部次長	
藪一之	NPO 法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会・見晴台学園学園長	
山本理絵	愛知県立大学教授	教育福祉学部長 実行委員長
湯浅恭正	中部大学教授	現代教育学部、元大阪市立大学教授

(実行委員) 実行委員は、本事業連携協議会委員である。

(事務局員)

田中良三（事務局長）

藪一之（事務局次長）

梅鉢武史（ハレバレ発達支援学習センター）

志村美和（NPO KIDS COLOR 春日井子どもサポートセンター）

寺谷直輝（愛知県立大学大学院生）

（主催）

NPO法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会
文部科学省

令和2年度

文部科学省「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」事業

『障害者の学びの場づくりコンファレンス in AICHI』
(プログラム集)

発行日 2021年1月9日

発行者 NPO 法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会

本事業事務局 見晴台学園大学校内

〒454-0871 名古屋市中川区柳森町 2708 板倉ビル 2F

Tel. 052-355-6752

E-mail: daigaku@miharashidai.com

